

特集

1 移行措置対応のポイント 第1回

担任が進める英語活動

—伝え合う力を育むために—

2 **実態把握** 英語活動の実施状況と課題

「担任が授業進行」は9割
指導面に不安 —読者アンケート結果より



4 **インタビュー 1** 英語活動のねらいと指導のポイント

相手の言葉を大切に作る姿勢や
「伝えたい」意欲を育てる活動を
松山大学院言語コミュニケーション研究科教授 **金森 強**

7 **学校事例 1** 伝え合う力を伸ばす活動計画と実践

英語を使った「対話」を通して
互いの心を通わせ理解し合う
島根県出雲市立上津小学校

13 **学校事例 2** 担任が主導する英語活動への挑戦

「分かる」「楽しい」という喜びで
英語活動への意欲を育む
千葉県八千代市立萱田小学校



17 **インタビュー 2** ねらいを達成する活動をつくるために

英語と日本語を交ぜながら
「英語ノート」のアレンジを
鳴門教育大大学院学校教育研究科准教授 **兼重 昇**

連載

20 **ベネッセのデータでみる子どもと教育** **NEW**

携帯電話の利用実態

24 **Hop! Step! 小学校英語!**

「英語ノート」を活動のヒントにし
伝わる喜びを感じさせる

佐賀県鹿島市立明倫小学校



28 **つながる学校と家庭の学び**

親子で知的好奇心を高める
「サイエンスニュース!」

宮崎県延岡市立延岡小学校教諭◎宇都宮 浩



32 **読者のページ Reader's VIEW** **NEW** / 編集後記

*本文中のプロフィールはすべて取材時のものです。また、敬称略とさせていただきます
*本誌記載の記事、写真の無断複写、複製及び転載を禁じます

特集

移行措置対応のポイント 第1回

担任が進める 英語活動

—— 伝え合う力を育むために ——

新学習指導要領の移行措置期間となり、外国語活動に取り組み始めた学校は多い。

活動のねらいは、子どもの伝え合う力の育成にある。しかし、初めて外国語活動を行う教師からは、

「文部科学省の『英語ノート』を活用した指導法が分からない」「英語の発音に自信がない」など、戸惑いの声が聞こえてくる。

今号では、外国語活動の中でも英語活動を取り上げ、その進め方について研究者の提言や学校の取り組みを紹介する。

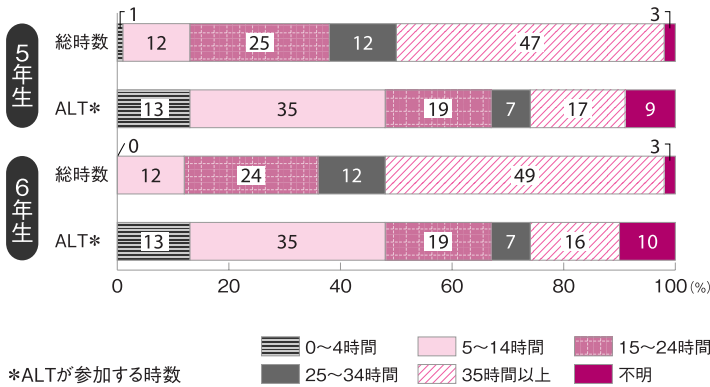


「担任が授業進行」は9割 指導面に不安——読者アンケート結果より

2009年度の英語活動の実施予定について、小誌は3～4月に読者アンケートを行った。「授業の進行(T1)はどなたが担当しますか」(複数回答)という項目に対し、88%が「学級担任」が担当すると回答した。しかし、同時に、英語活動自体のねらいや意義への理解に課題があることや、担任が英語活動を進めるに当たって不安が大きいことが明らかになった。

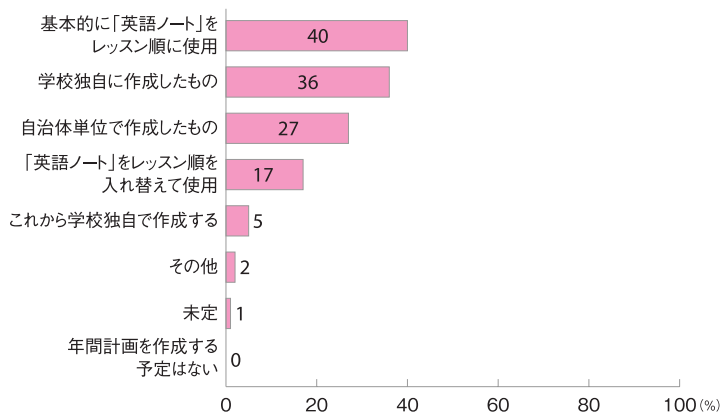
35時間実施は5割程度

Q. 5・6年生の英語活動の実施時数は年間で何時間ですか



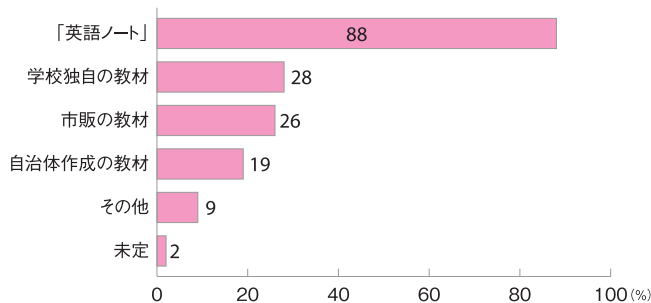
指導計画にはさまざまな素材を使用

Q. 年間指導計画として、どのようなものを使用しますか(複数回答)



最も多く使用する教材は「英語ノート」

Q. 教材は、どのようなものを使用しますか(複数回答)



移行措置が始まったばかりだが、年35時間の英語活動を予定している学校は5割ほどあった。年4時間以下という学校はほとんど無い。年間の活動計画、並びに実際の活動は、「英語ノート」に沿って進める学校が多いようだ。

読者アンケート概要

実施主体: 「VIEW21」編集部
 対象: 全国の「VIEW21」小学版読者モニター(小学校教師)
 実施時期: 2009年3～4月
 方法: 「VIEW21」読者モニターへ郵送にてアンケート用紙を配布。ファクスとウェブサイトにて回答を回収
 有効回答数: 112

詳しい結果はこちらをご覧ください
<http://benesse.jp/berd/HOME>>情報誌ライブラリ(小学校向け)
 >「VIEW21」2009年度Vol.1>特集 実態把握

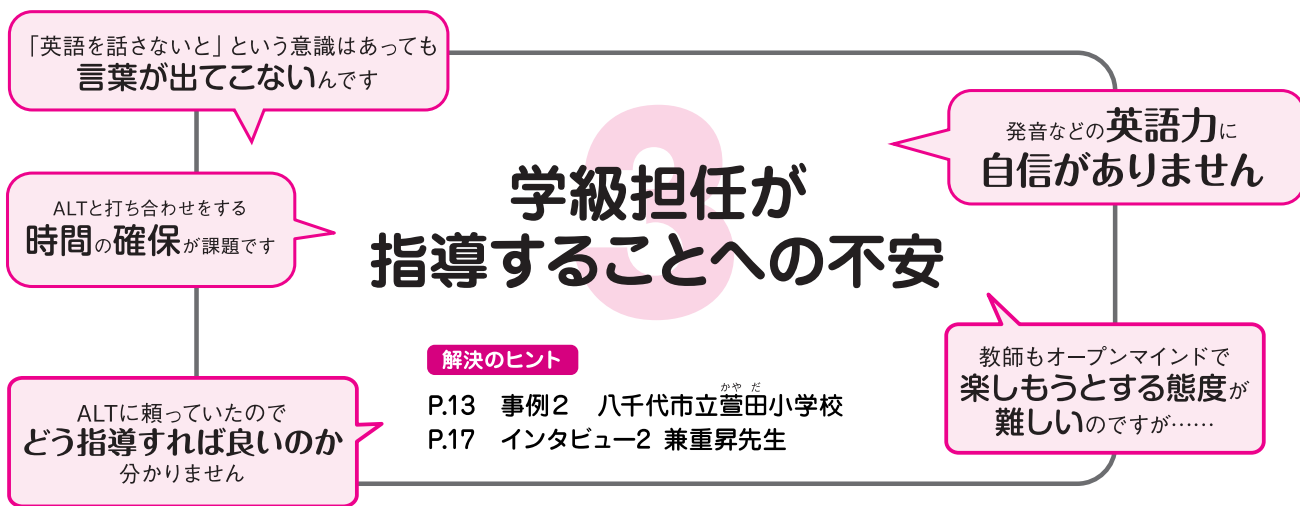
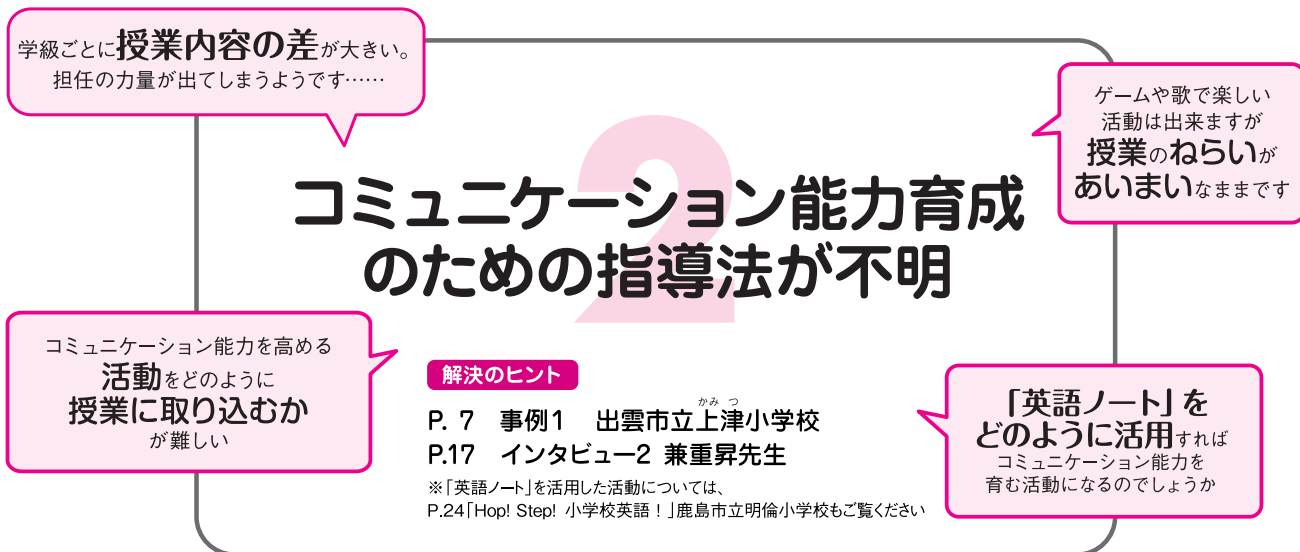
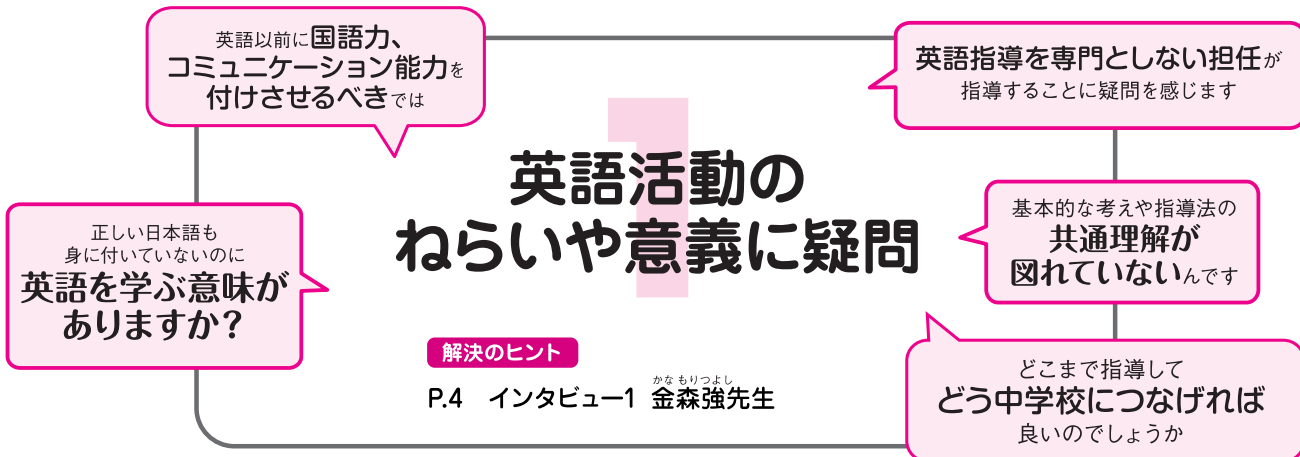
担任の英語使用頻度や「英語ノート」の指導書を参考にする度合いなど、左記以外のアンケート結果も公開しています。ぜひご参照ください



担任が進める英語活動

英語活動自体への疑問に加え、担任が指導することへの不安が大きい

Q. 英語活動に関する課題や疑問はありますか(自由記述回答)



相手の言葉を大切に作る姿勢や「伝えたい」意欲を育てる活動を

松山大学院言語コミュニケーション研究科教授 **金森強** かなもり つよし

英語活動が進められている一方で、ねらいや意義の共通理解はまだ不十分という課題も見えてきた。求められている活動内容や指導方法は、どのようなものか。中央教育審議会外国語専門部会委員である松山大学院の金森強教授に聞いた。

英語活動のねらいと意義

Q1 英語活動のねらいを改めて確認させてください

A1 英語力よりも「コミュニケーション能力を育てる」ということが目的です

新学習指導要領には「コミュニケーション能力の素地を養う」とありますが、この能力は、会話や表情、ジェスチャーなどの表現方法を通して気持ちを伝え合う力です。漢字一字で表すなら「想」がふさわしいかもしれません。相手の「想い」をじっくり考え、自分の「想い」を伝えるというイメージです。

コミュニケーションの出発点は、相手に興味を持つこと。この気持ちから、相手の話にうなずいて反応したり、言葉の意味をしっかりと

り考えたりする態度が生まれます。こうした人とかかわるために必要な力を育むことが英語活動のねらいです。

子どもが十分にコミュニケーションを取れたかどうかは、活動を振り返る言葉で分かれます。「自分のことを話せた」という子は自分だけに関心が向いています。が、「みんなの好きなものが分かった」「Aさんの表情や言い方が良かった」といった言葉は、気持ちや情報のやりとりが出来たことを示しています。

Q2 そのような力は他教科でも育てられるのではないのでしょうか。なぜ英語活動

で育む必要があるのでしょうか

A2 もちろん他教科でも育ちますが、英語活動には他教科にない利点があります

英語活動で大切なこと

- 1 聞き合い、伝え合う力の育成が英語活動のねらい。英語活動だからこそ、これらの力は育みやすい
- 2 日本語と英語の発音の違いに気付くことや、コミュニケーションの楽しさを体験することが何より大切と考えて、活動を計画する
- 3 「話したい」「聞きたい」と思わせる活動を設定することで、相手を意識したコミュニケーションが活性化される

活動の振り返りは、P.6図2の項目でチェック!

まず、言葉が分かりにくいいため、相手の話をしっかりと聞くこととし、表情やジェスチャーにも注意を払うようになります。日常生活では話題になりにくいことを質問し合えるのも、英語活動ならではです。好きな食べ物や動物、将来の夢などを話すことによって、子ども同士の間が深まると同時に、相手の話を聞く楽しさに気付きます。英語活動によって普段あまり話さない子ども同士の交流が生まれ、学級経営がうまくいくようになったという話を耳にします。

外国人や異文化への抵抗感が少ない、なるべく早い時期に英語に触れさせることにも大きな意味があります。実際、小学生はALTとすぐ親しくなり、それが入り口となって外国語や異文化への興味を深めていきます。

担任が進める英語活動



かなもり・つよし◎中央教育審議会外国語専門部会委員、文部科学省スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール（SELHI）企画評価協力委員、日本英語音声学会、日本児童英語教育学会・小学校英語教育学会理事。主著に『小学校英語教育の進め方―「ことばの教育」として―』（共著・成美堂）、『小学校の英語教育―指導者に求められる理論と実践』（教育出版）など。全国の学校を回り、教員研修や授業指導を行っている。

A3 Q3 なぜ担任が教える必要があるのでしょうか。ALTに任せてはいけませんか
コミュニケーションを活発にするには、担任と子どもが一体になった活動が極めて効果的です

担任と子どものつながりが非常に深いのが、小学校の特色です。たとえすらすと言えなくても担任が手本を見せれば、子どもは勇気を出して話そうという気になるでしょう。担任ならば、子どもの発達段階、関心、状況に応じた素材を用意できます。スポーツ好きな子にスポーツの話させたり、家庭の問題に悩んでいる子に配慮して家族の話避けたりすることは、ALTには出来ません。また、教師にとって英語活動の指導法を考へることは、「教えること」を振り返る良い

機会になります。「どうすれば子どもは理解するか」という視点でゼロから考える経験は、他教科の指導にも通じるはず。教材の工夫など、新たな発想が生まれると思います。

求められる内容

Q4 活動の内容は、どのように決めていけば良いのでしょうか

A4 「コミュニケーションを深める」という視点から活動を組み立ててください
例えば、鉛筆を指さして「What's this?」と尋ねても、あまりに単純で子どもに「答えた」という気持ちのわき起こりません。「話したい」「聞きたい」という状況を設定することが何より重要です（P.6図①）。

Q5 「子どもにスキルや知識を教える必要はない」と言われますが、ある程度の言葉や表現を教えないと活動が成り立たないのでしょうか

A5 「スキルの定着」は不要ですが、「英語を使用する体験」は必要です

子どもがあるフレーズに出合っただけで使えるようになり、コミュニケーションを取れたという感覚を味わう。これが「体験」です。体験のためにフレーズを皆で言っただけで慣れることは必要です。ただ、それを覚えているかをテストする必要はありません。必要な時に再度、出合うようにすれば良いのです。

Q6 「英語を使用する体験」のために活動で使うフレーズは、教師が教えれば良いのでしょうか

A6 最初から教えずに、子どもが「知っていた」と思うように誘導しましょう

例えば、数を質問したくなる場面を設定して、「英語では何と言うのだろう」と疑問を抱かせる。その上でALTに発話してもらい、「How many?」というフレーズを聞き取らせませす。子どもは聞こえるままに「ハウメニー」と言いますが、「how」と「many」という単語に分けて考えさせる必要はありません。大人でも、全く知らない外国語を覚える時にはフレーズを丸暗記するのと同じです。それ以上の詳しい学習は中学校で進めれば良いのです。

Q7 指導上、気を付けるべきことを教えてください

A7 気を付けて欲しいことは、次の4点です

①すべての活動に目的を設ける

活動を組み立てる時には、まず「将来の夢を話す」「行きたい外国を伝える」など、目的となる活動を設定します。歌やチャントは、活動に必要な表現が含まれるものを選びます。特に歌は、メロディーの良さや知名度に引かれて、小学生に難しすぎる歌詞の歌を選ばないよう気を付けたいものです。

どの要素をどの順序で進めるかは、活動の目的に応じて柔軟に変えましょう。活動パタ

ーンにはこだわりすぎず、目的と照らし合わせて活動を進めることが大切です。

②日本語と英語の発音の違いに気付かせる

外国語の特徴に気付くことは、外国語能力の基本です。子どもが日本語と英語の発音の違いに気付いたならば、「よく聞いていたね」と褒めてください。より注意して聞くようになりす。例えば、英語の *miss* と日本人が発音する「ナース」は、明らかに違う音です。ALTの発音をしっかりと聞かせ、違いに気付かせるようにしましょう。

③「気持ちを込める」ことを意識させる

日本語で話す時には、状況に応じて声の大きさや抑揚を変えます。英語活動でも同じように、「どのような場面で、どのような目的で、どのような気持ちで」英語を使っている

のかを、子どもに意識させましょう。意識するからこそ、豊かなコミュニケーションが生まれるのです。言葉に気持ちを込める活動を取り入れるのもお勧めです(図1②)。

④たっぷり聞かせてから発話させる

子どもになるべく「失敗」させないようにしてください。失敗を恐れるとカタカナ発音で文章を読み上げることに集中してしまいがちです。まず十分に聞かせ、「絶対に言える」くらいになってから話をさせてください。その際シャワーのように聞かせても、シャワーのように流れ落ちるだけです。ある程度、意味を理解させておかなければ、頭に残りません。聞いた後はたっぷり話すことも重要です。単純な反復練習ではなく、ゲームなどを取り入れると、意欲的に取り組みます(図1③)。

図1 子どもが楽しく取り組める英語活動の例

①自分のお気に入り紹介

◎手順

自分が気に入っている物を写した写真を5枚用意する。数人のグループを組んで、1人ずつ「This is a picture of my ...」と写真を紹介する

◎ポイント

自分の好きな物だから、皆に伝えたいという気持ちが起こる。逆に、友だちのお気に入りを知りたいという気持ちから、熱心に聞き取ろうとする

②成り切りオーディション

◎手順

次のような場面を設定し、「Where do you want to go?」というフレーズを場面に合わせて言う。場面に合った言い方が出来るように、皆で挑戦する

- ①道に迷っている低学年の子に「どこに行きたいの?」と話し掛ける
- ②おばあちゃんの誕生日に「どこに行きたい?」と希望を聞く
- ③どこに行きたいのかがはっきりしない人に答えを促す
- ④遊びに行った時「次はどこに行こうか?」と誘う

◎ポイント

場面を想定し、気持ちを込めて話をさせる。教師が「優しい言い方だね」などと褒め、子どもに「会話では気持ちを込めることが大切だ」と気付かせる。このフレーズをチャントのように繰り返しても、それはリズム練習にしかならない

③当ててみて~クイズ

◎手順

2人1組になり、握手をする。「不思議なケーキ屋さんがあります。ここで売られているケーキに乗っている果物は何でしょうか」と教師が質問。1人がある果物を思い浮かべ、握手をした手から自分が想像した物を相手に伝える。もう1人は3回以内で当てる

A: Is it a lemon? B: No, it isn't a lemon.

A: Is it a strawberry? B: Yes, it is a strawberry.

◎ポイント

同じ問答を繰り返すことにより、自然とフレーズが身に付く。「不思議な」と入れるのは、それによりいろいろな果物を想像するようになるから

図2 活動を振り返る際のチェックポイント



全員がコミュニケーションを取れているか
教師や特定の子どもが話すのではなく、すべての子どもが情報や気持ちを伝え合い、聞き合っているか



友だちとのかかわりは生まれているか
互いに理解を深め、新しい関係が生まれていくような活動になっているか



全人教育としての学びになっているか
英語の表現だけに目が向き、相手を思いやったり、気持ちを込めたりすることをおろそかにしていないか。教育に不適切な題材を選んでいるか



自己表現の工夫はあるか
「伝えたい」という気持ちを持てるような、自分について話を入れられる活動になっているか

英語を使った「対話」を通して 互いの心を通わせ理解し合う

島根県 出雲市立上津小学校

出雲市立上津小学校は、すべての教育活動で「伝え合う力」の向上を目指している。英語活動もその一環ととらえ、そのための目標と活動を設定。相手、場面、状況などを意識した表現活動により、伝え合う力を育成している。

取り組みの3つのポイント

- 1 国語科や特別活動などと共に、「伝え合う力」を育成する取り組みの一環として英語活動を実施する
- 2 「英語活動への関心・意欲・態度」「コミュニケーション能力」「国際理解」の3点から目標を設定し、指導計画や活動方法を改善する
- 3 目標を達成するための「目指す活動像」を、教師間で共有。模擬授業などを通して授業力の底上げを図る

英語活動の位置付けとねらい

「伝え合う力」を育成する
一環としての英語活動

出雲市立上津小学校では、「伝え合う力の育成」を研究主題としている。研究は、協働性は高いものの、物怖じしがちで表現力の乏しい子どもが目立ってきたことをきっかけに2005年度に始まり、国語科を核としながら教育活動全体で取り組んできた。

英語活動は「出雲市スピーキングリッシュ事業」の一環として05年度に始まった。6年生は「総合的な学習の時間」(以下「総合学

School Data

◎1874(明治7)年に開校。出雲市東南部の農山村地域に位置する、1学年単学級の小規模校。2005年度に、国語科を中心として「伝え合う力」の育成に向けた校内研究を開始。07年度からは研究の一環として英語活動の充実にも取り組む。



校長◎福井昭二先生

児童数◎73人 学級数◎7学級(うち特別支援学級1)

所在地◎〒693-0101 島根県出雲市上島町869

TEL◎0853-48-0305

URL◎http://www.izumo.ed.jp/kamitsu-sho/

習)で週1日1時間と、他4日は帯時間を使い各15分、他学年は月1時間行ってきた。英語を通じて互いの心を通わせ理解し合いながら楽しそうに活動する子ども様子から、『伝え合う力』の育成に最適(国際理解担当「当時」・佐貫晃弘先生)と判断。07年度に文部科学省の小学校英語活動拠点校(*)の指定を受けて以来、5年生でも「総合学習」で週1時間の英語活動を行う。5・6年生とも毎回、担任とALTとのチームティーチングで、英語活動ならではの特徴を生かして伝え合う力を伸ばそうと、活動計画や方法の改善に取り組む。

*小学校における英語活動等国際理解活動拠点校。指導方法などの確立を図るため、文部科学省が全国で40校中1校程度を指定。08年度は、全国で614校が指定された

年間指導計画の具体例

三つの目標に基づき 年間指導計画を作成

同校では、年間の指導計画を「ユニット」という単位で考えている。例えば、5年生の年間指導計画は八つのユニット（単元）で構成されている（図1）。「英語活動への関心・意欲・態度」「コミュニケーション能力」「国際理解」の視点で設定した、次のような目標を達成するために練った計画だ。

①英語活動への関心・意欲・態度——英語を聞いたり話したりする活動を通して、英語の音声に慣れ親しみ、コミュニケーションの楽しさを感じさせる。

②コミュニケーション能力——人とのコミュニ

ケーションを取る能力・態度（伝え合う力、かかわる力）を育む。

③国際理解——英語を始めとする外国語や外国の生活・文化に対する興味・関心を高める。一つのユニットに充てるのは3～6時間。

毎時間、少しずつレベルを上げていく「スモールステップ」を意識して活動の流れを作っている。ユニットの最後にはインタビューなどの課題を設定したタスク活動を必ず行い、子どもが達成感を感じられるようにしている。

Unit 4 買い物をしよう (5)	
<ul style="list-style-type: none"> ・買い物の英語表現に興味をもち、買い物ゲームなどに進んで取り組もうとする (関) ・相手の話をよく聞いて (目を見て・最後まで) 楽しくかわる (コ) 	<ul style="list-style-type: none"> ・果物渡しゲームなどを通して、買い物の英語表現に慣れる ・教師の用意した店で買い物ゲームをする ・商品作りをする ・自分たちの店で買い物をする
<p>【食べ物】(既習語) + 自分の売りたい物 【表現】 May I help you? Yes, please. How much? Three dollars.</p>	
Lesson 5	

ポイント4

「スモールステップ」とする

1 時間目は歌やチャンツを通して国名に慣れさせ、2 時間目からインタビューのための表現を少しずつ取り入れる。最終目標は、6年生の広島への修学旅行で外国人に行うインタビュー。5年生のうちから伝えておくことで目的意識や学習意欲を一層高め、一方で徐々に英語表現に親しませる

Unitの構成 / Unit 7の場合

時	学習活動
1	<ul style="list-style-type: none"> ●国名に慣れよう ・国名・国旗当てゲーム ・スリーヒントゲーム ・ミッシングゲーム ・歌『Hello Song』(毎時間)
2	<ul style="list-style-type: none"> ●出身国を尋ねる表現に慣れよう Where are you from? I'm from ... ・チャンツ ・カルタゲーム ・国旗集めゲーム
3 ・ 4	<ul style="list-style-type: none"> ●インタビューの表現に慣れよう Excuse me. May I ask you some questions? My name is ... Nice to meet you. Where are you from? I'm from ... I like ... Do you like ... ? What do you like? Thank you. Good-bye. Have a nice day. Once more, please. Slowly, please. ・チャンツ ・インタビューゲーム ・クリスクロスゲーム ・有名人成り切りゲーム ・会話カードゲーム
5	<ul style="list-style-type: none"> ●インタビューの表現を使って、友だちにインタビューしてみよう ・チャンツ ・会話カードゲーム ・インタビューゲーム
6	<ul style="list-style-type: none"> ●外国の人にインタビューして親しくなろう ・チャンツ ・会話カードゲーム ・インタビュー

実践例は
P.10,11へ

Unit 8 ありがとう (3)	
<ul style="list-style-type: none"> ・ALTの先生への感謝の気持ちを表す活動に進んで取り組もうとする (関) ・感謝の気持ちをしっかり伝える (コ) 	<ul style="list-style-type: none"> ・ALTの先生と今年度の活動を振り返りながら、ゲームなどをして楽しむ ・感謝の気持ちを伝える方法について考え、準備をする ・先生ありがとう会を開く
<p>【表現】 Thank you for ... I enjoyed ... My favorite activity is ...</p>	

担任が進める英語活動

図1 08年度 5年生の年間指導計画表(※)

目標: (関) 英語活動への関心・意欲・態度 (コ) コミュニケーション能力 (国) 国際理解

単元名 (時数)	Unit 1 あいさつをしよう(3)	Unit 2 夢の時間割を作ろう(4)	Unit 3 好きな物は?(5)
目標	<ul style="list-style-type: none"> 気分を表す英語表現を使い、歌やゲームに進んで取り組もうとする(関) たくさんのお友達と進んでかかわる(コ) 	<ul style="list-style-type: none"> 時間割を作ることに興味をもち、活動に進んで取り組もうとする(関) 作った時間割を発表し合い、相手が工夫した所を見付ける(コ) 	<ul style="list-style-type: none"> 好きな物を探る英語表現に関心をもち、ゲームなどに進んで取り組もうとする(関) お友達について新しい発見をしながら、言葉や態度を考えて気持ちよくなる(コ)
活動内容	<ul style="list-style-type: none"> 気分を表す英単語に慣れる 気分を表す英語表現に慣れる 気分を表すカード交換ゲームを楽しむ 	<ul style="list-style-type: none"> 教科を表す英単語に慣れる グループで夢の時間割を作る 作った時間割を発表し合い、工夫した所を見付け合う 	<ul style="list-style-type: none"> これまでに触れた英単語を使ったゲームを行い、探る表現に慣れる 二つの項目についてインタビューゲームをする 自分の考えた項目を入れてインタビューをする
主な言語材料	<p>【気分】 happy, hungry, sleepy, sad, tired, hot, cold</p> <p>【表現】 How are you? I'm happy.</p>	<p>【教科】 Japanese, math, social studies, science, P.E., music, arts and crafts, English, home economics</p> <p>【表現】 On Monday, the first lesson is ...</p>	<p>【色】 【動物】 【食べ物】 【季節】 【教科】 (既習語)</p> <p>【表現】 What ... do you like? I like ...</p>
備考 「英語ノート」	Lesson 1、Lesson 2	Lesson 8	Lesson 3、Lesson 4

ポイント1

「英語ノート」は部分的に活用

年間指導計画と文部科学省の「英語ノート」(試作版、以下同)を照らし合わせて、「英語ノート」が教材として使える箇所をピックアップして、明記する。「英語ノート」のレッスンの順番にとらわれないようにし、聞き取り活動の部分や巻末の絵カードのみを使うなど、柔軟に活用している

ポイント2

タスク活動の設定

興味・意欲を引き出すために、タスク活動や表現・交流の場を設定してから言語材料を検討する。Unit 2 の場合、「時間割を作らせたら、子どもは夢中で取り組みそうだな」と考え、タスク活動を「グループで夢の時間割を作る」と設定してから必要な言語材料を決めている

ポイント3

活動に必然性を持たせる

意味のある場面を設定することによって、活動に必然性を持たせるようにしている。最後のユニットではALTへの「ありがとう会」を開き、英語で感謝の気持ちを伝える場を設定した。「ALTにお礼を伝えたい」という子どもの気持ちを引き出し、主体的に学習に取り組めるようにした

単元名 (時数)	Unit 5 ハロウィーン(3)	Unit 6 私の出来ること・得意なこと(6)	Unit 7 インタビューをしよう(6)
目標	<ul style="list-style-type: none"> ハロウィーンの行事に興味をもち、衣装作りなどに進んで取り組もうとする(関) ゲーム等で楽しくやりとりをする(コ) 	<ul style="list-style-type: none"> 動作や出来ることを表す英語表現に興味をもち、進んで活動しようとする(関) 動作や出来ることを表す英語表現を使い、自分の出来ることや得意なことを相手に意識して伝えたり、相手の話をしっかり聞いたりする(コ) 	<ul style="list-style-type: none"> 外国の人にインタビューすることに関心をもち、進んで活動に取り組もうとする(関) 相手の気持ちを考えながら、やりとりをする(コ) 外国の人の考え方を知り、日本との共通点や相違点に気付く(国)
活動内容	<ul style="list-style-type: none"> ハロウィーンについて話を聞いたり、絵本を見たりする ハロウィーンの衣装作りをする ハロウィーンパーティーを楽しむ 	<ul style="list-style-type: none"> 動作を表す表現、canを使った表現に慣れる 自分の出来ることや得意なことについてのスキットを作り、お友達と発表し合う 	<ul style="list-style-type: none"> 国名に慣れ親しむ インタビュー1の表現(下記)に慣れ親しむ インタビュー2を基にして、自分の聞きたいことを考え、練習する 外国の人へのインタビュー活動を行う
主な言語材料	<p>【お化け】 skeleton, Frankenstein, Dracula, witch, bat, jack-o'-lantern</p> <p>【表現】 Trick or treat.</p>	<p>【動作】 clap, skip, drink, eat, sing, jump, laugh, dance, swim, ski, skate, cook, whistle, play the piano, play soccer, play baseball</p> <p>【表現】 I can ... Can you ... ? Yes, I can. / No, I can't.</p> <p>【感想】 great, good, cool, nice</p>	<p>【インタビュー1】 Excuse me. May I ask you some questions? My name is ... Nice to meet you. Where are you from?</p> <p>【インタビュー2】 What ... do you like? Do you know ... ? Can you ... ?</p>
備考 「英語ノート」		6年生用の「英語ノート」で扱われる内容であるため、実際の指導では、5年生では本Unitは扱わないこととした(Unit 2 と 3 の配当時間増で対応)	

※6年生の年間指導計画は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイト<http://benesse.jp/berd/>に掲載しています。
HOME>情報誌ライブラリ(小学校向け)>「VIEW21」2009年度 vol.1>特集 事例1島根県出雲市立上津小学校

英語活動の実践

「目指す活動像」を共有し 教師間でぶれない活動を展開

次に個々の授業の指導の進め方を見てみよう。上津小学校では、英語活動における「目指す活動像」(図2)を明確にし、教師間で共有している。実際の指導もこれを基に行い、教師の違いによる活動のばらつきを無くそうとしている。

今回紹介するのは、5年生のユニット7「インタビューをしよう」の6時間目(図3、08年度3学期実施)だ。本時のねらいは、「話を最後まで聞き、相手の顔を見ながら、会話する(コミュニケーション能力)」と設定。普段よく接するALTではなく、初対面の外国人と話す機会を設けようと、市内の高校などに勤務する外国人8人を招いて活動した。指導を担当した5年生担任(当時)の山崎

美重先生は、「相手の都合を聞いてから質問をする」「時間を割いてもらったことに対して、きちんとお礼を言う」などは、コミュニケーション上では非常に大切と考え、重視して活動に取り入れた。



活動は、机やイスを片付けて、床に直接座る形で進められた。この授業は、公開授業として行われたため、参加者がいた

図2 目指す活動像(教師が目指す活動)

- eye contact (相手の目を見て)、clear voice (聞き取りやすい声で)、good reaction (しっかり聞いて反応)の三つの英語活動のねらいが、意識されている活動(★)
- 相手意識・目的意識・場面や状況意識・表現や理解の方法意識・評価意識を明確にした必然性のある活動
- ねらいと評価が明確で一体化した活動
- 適切な支援がなされている活動
- 全員が活動に参加し、一人ひとりが主役の活動(児童が物怖じせず取り組む活動)
- 分からないことや間違いが生かされる活動
- 児童が「出来るようになった」「分かった」「挑戦した」という楽しさ、「学び」としての楽しさを実感できる活動

教師の支援

- 元気良くあいさつをし、楽しい雰囲気を作る
- (参会者に対して)ペアであいさつに行き、一方が困っていたら助けて良いことを事前に伝えておく
- 気持ちの良いかわり方が出来るように、「かわり方」カードを掲示する

HRT

- 児童と一緒に歌い、リラックスできる雰囲気を作る
- 声を出しにくい児童が安心できるように、近くで一緒に練習する

ALT

- 良い表情や動きをしている児童に声を掛けながら、楽しい雰囲気を作る
- リズムに合わせて、たくさん英語を聞かせる

- カードを見てもどう言ったら良いかわからない時は、ペアの相手にヒントをもらうように声を掛ける
- ゲームの後で、相手の顔を見て聞き取りやすい声で話をしていたり、2人で協力して答えていたり、相手の答えに反応を返したりする児童を褒める

- 今日のインタビュー活動のめあては、「気持ちの良いかわり方(eye contact・good reaction)を特に大切にしながら活動すること」であると分かるように、まとめて掲示し確認する
- 相手の言葉を受け取ることが大切なことに気付くことが出来るように、デモンストレーションでは、聞き直したり、相手の言葉を繰り返すなどのリアクションを入れたりする
- 世界地図にシールを張り、インタビューした相手の国や、インタビューした人数が分かるようにする
- どちらが先に言うか、どのような質問が良いかなど、2人で打ち合わせをしておくように助言する
- 参会者の前に立つと、何も言えなくなる場合は、ペアのそばにいて、言えそうになったら会話に参加するよう助言する

HRT

- ペアでインタビューを行うが、英語を話すことに不安を持っている児童のそばで様子を見て、時には一緒に活動する

ALT

- 全体の様子を見て回り、よい表情で活動している児童を褒めたり、不安そうな児童を励ましたりする

- めあてに沿った感想を児童が発言出来るように、声を掛ける
- 児童の頑張りを認め、満足感を持たせる

★:図3⑤Interview(インタビュー)の活動でのHRTの発言参照

担任が進める英語活動

図3 5年生のUnit 7「インタビューをしよう」の6時間目の流れ H:HRT(担任) C:児童 ■:HRTがねらいを児童に伝えたり振り返りをさせたりしている発言

時間	学習活動	授業中の教師の声掛けと児童の様子
0:00	<p>① Greeting (あいさつ)</p> <ul style="list-style-type: none"> 先生や友だちとあいさつをする 参加者とあいさつをする <p>Hello. How are you? I'm (good / cold). Nice / Oh, cold. Thank you.</p>	<p>H: Are you ready? C: Yes. H: Greeting time! ALTが出てあいさつを交わり、男女1人ずつと先生1人とあいさつすることを指示。クラスメートとあいさつする。HRTが日本語で「元気のいい声でちゃんと相手に伝えてください。Let's start!」と参加者ともあいさつを交わさせる</p> <p>H: どうでしたか? Aさん、あいさつをしてみてください? C: 初めて会う人だったので、特に目を見て話そうと心掛けました H: 向こうから返事は返ってきた? C: はい H: じゃあ、ちゃんと伝わったんだね。みんな、笑顔でね、相手の人の顔をしっかりと見てあいさつが出来ていたと思います。反応を返している人もたくさんいました。笑顔も反応の一つですよ</p>
5:00	<p>② Song (歌)</p> <ul style="list-style-type: none"> 「Hello Song」(「森のくまさん」の曲)を動きを付けながら歌う <p>③ Chant (チャンツ)</p> <ul style="list-style-type: none"> インタビューで使われる会話文を練習する 	<p>HRTは、「Let's sing a song!」「Let's do a chant!」という言葉で活動の区切りを伝えたり、「Once more, please.」という言葉で全体の動きを指示。それを受けて、ALTが歌やチャンツをリードし、児童が復唱する。児童は教室中を動き回り、体全体で表現していた</p>
11:00	<p>④ Game (ゲーム)</p> <ul style="list-style-type: none"> 「会話カードゲーム」をペア対抗で行う。めくった会話カードを見て、その場面の質問を相手ペアに行い、問われたペアが答える カードの場面 ①相手の都合を聞く ②自己紹介をする ③どこから来たか聞く ④好きな物を聞く ⑤お礼を言って別れる ⑥もう一度言ってもらよう頼む 	<p>H: Next... let's play a game! HRTがルールを日本語で説明した後、グループごとに輪になってゲームを始める。HRTとALTは、グループを回ってサポートし、うまく発言できた児童を「Oh, nice!」「Clear voice!」などと褒めてゲームを盛り上げる</p>
17:00	<p>⑤ Interview (インタビュー)</p> <ul style="list-style-type: none"> 「相手の顔を見ながら伝えよう」「最後までしっかり聞こう」というめあてを伝える 教師がALTとデモンストレーションを行う(下線部は、実際には児童2人がそれぞれ言う。「Oh, America!」など答えを繰り返す反応を入れながら行う) 	<p>H: 今日は、いよいよインタビューを通して外国の人と仲良くなります。今までに、英語の時間には、この三つの気持ちの良いかかり方(図2★)に気を付けていこうねと、ずっとやってきました。今日は特に次の二つを大切にしてください。一つ目は、相手の顔を見て、ちゃんと自分の思いを伝えてください。もう一つは、相手の話を最後までしっかり聞いて、相手の言葉に何か反応を返してください</p> <p>デモンストレーションの後、世界地図のカードを配布してインタビューを始める。児童は2人1組になって、事前に作ったプレゼントを持って外国人にあいさつして回る。その間、HRTとALTは、褒めたり励ましたりしてサポート。最初は不安げな表情の児童が多かったが、1人と話して自分の英語が伝わり、聞き取りも出来るかと分ると、自信を付けて次々に他の人にもあいさつをして回っていた</p> <p>外国人も「Where are you from?」などの質問をしていた。児童にとっては想定外のことだったが、「I'm from Japan.」などきちんと返答していた</p>
23:00	<p>A: Hello. B: Hello. A: Excuse me. May I ask you some questions? B: Yes. A: Thank you. My name is ... Nice to meet you. B: Nice to meet you, too. My name is ... A: Where are you from? B: I'm from ... A:児童 B:外国の人 A: Once more, please. B: I'm from ... A: I like ... What ... do you like? B: I like ... A: Slowly, please... A: Thank you. Good-bye. Have a nice day. B: Thank you. Good-bye.</p> <p>外国人にインタビューをする</p>	
39:00	<p>⑥ Comments (感想発表)</p> <ul style="list-style-type: none"> 「何人にインタビューできたか」「国名はどこか」など、教師が児童に質問しながら、今日の活動の感想を発表する 教師、外国人、ALTが活動の感想を話して、終わりのあいさつをする 	<p>H: どうでしたか? やってみて C: 最初は緊張したが、慣れたら楽しく出来たので良かったです H: 最初は恥ずかしくて顔を見られなくて言っていたけど、どうだった? C: 少しずつ顔を見て話すことが出来ました C: 外国の方はそれぞれ違う国から来ているのに、日本の食べ物が好きだったりして、日本に親しみを持ってきているのがうれしかったです H: 日本の食べ物? どんな食べ物? C: お好み焼きとかおでんとか H: ええ。日本に対してそんな風に思ってもらっていたんだね C: 最初は少し不安だったけど、皆さん優しい人だったので、安心して出来ました H: リアクションについては、どうだった? Bさん、ちょっと首をひねっていたけど、困ったことがあったら、それを言ってもいいよ。リアクションは返せましたか? C: そんなに出来なかった…… H: すごく良い笑顔で話してたよね。笑顔もリアクションの一つですからね</p>
45:00		

*上津小学校 平成20年度「第5学年 英語活動指導案」を基に編集部が作成

英語活動の工夫と、教師・子どもの変化

**活動の「型」を作ると
教師も子どもも安心できる**

同校の英語活動における一つ目の工夫は型の設定だ（図4）。菅原純子校長（当時）は、

「多くの教師が英語活動に戸惑うのは、自分なりの型を持っていないからです。活動の流れを明確に示せば、気持ちはかなり楽になります」と話す。型があればALTとの打ち合わせも、言語材料やゲームの内容など最小限で済む。子どもも安心して活動に臨め、「『チャンツ』で学んだ内容は、最後のインタビューで必要になる」と主体的に学ぶようになる。

二つ目はヒアリングの重視だ。佐貫先生は、「もう少し話せるようにしたい」という思いから言葉や表現の指導を増やしたことがあったが、途端に子どもの反応が悪くなったと言う。「子どもは自信が無いことは表現しながら、気持ち引いてしまうことを痛感しました。以来、たくさんの知識を覚えさせるのではなく、少ない知識でいかに多様な表現をさせるかを心掛けています」

三つ目は模擬授業だ。全学年の担任を子ども役とした模擬授業と意見交換を、全教科の研究授業の前日に行う。山崎先生は、「実際に模擬授業をしてみて初めて展開に無理があ

ると気付くこともあります。活動方法を見直す良い機会になっています」と効果を話す。

**まず担任が発音すれば
子どもは話しやすい**

08年度に5年生担任となった山崎先生は英語が苦手だった。年度前半は、07年度と同じようにALT中心の活動で進めた。

「1学期の間は自信がなく一歩引いた状態でした。でも、週1回の活動をするためには計画的に活動を積み重ねていく必要性を感じ、ALTの進め方を見ながら自分が出来ることを探し、少しずつ取り組むようにしました」

それでも始めは発音が気になったり、頭で分かっているでも声に出せなかったりしていた。そこで、よく使う英語の表現をメモして手元に持ち、さりげなく見ながら言うようにした。既に年間計画があったことも大きく、10月には担任主導で活動できるようになった。

「子どもに積極的に表現させるには、まずは担任がやってみないと。担任が主導する意味はそこにあると思います。確かに苦労はありますが、子どもが他教科での発表でも声や態度が堂々とするなどの、表現力の変化を見ていると、やってよかったと思います」と、山崎先生は活動の手応えを感じている。

図4 1時間の活動の流れ

1. あいさつ…笑顔で気持ち良くスタートする
2. 歌…声を出し、体を動かしてウォーミングアップをする
3. チャンツ…前時の復習や本時で使う言葉やフレーズを練習する
4. めあての提示…共通のねらいを持って活動に入る
5. デモンストレーション…教師のモデルで課題を明確にする
6. チャレンジ…子どもが進んで表現する気持ちを大切に
7. ゲーム…心と体を使う・たくさんの友だちとかわる・言葉を何回も使う
8. 感想発表…めあてに沿って自分のことや友だちのことを振り返る



出雲市立上津小学校
山崎美重 Yamasaki Mie
5年生担任。研究主任



出雲市立上津小学校
佐貫晃弘 Sanuki Akhiro
6年生担任。国際理解教育担当



出雲市立上津小学校校長
菅原純子 Sugahara Junko

「分かる」「楽しい」「嬉しい」という喜びで 英語活動への意欲を育む

千葉県八千代市立萱田小学校

八千代市立萱田小学校は、2007年度に文部科学省「小学校における英語活動等国際理解活動拠点校」の指定を受けてから英語活動に取り組み始めた。1年目の07年度末のアンケートで子どもの意欲や理解度が低かったことを受け、08年度には担任主導の活動に切り替えるなどさまざまな改善を行っている。

取り組みの3つのポイント

- 1 英語活動への子どもの意欲を高めることを重視し、「分かる」「楽しい」という気持ちになるような活動を目指す
- 2 担任は進行役、ALTはサポート役となり、子どもの実態に合わせた活動を展開する
- 3 「英語ノート」を基にしなが、子どもの実態と照らし合わせてゲームを組み込んだり、活動の流れを変更したりして活動計画を立てる

2年間の英語活動での変化

「二つの「分からない」から 子どもの意欲が低迷

八千代市立萱田小学校では、拠点校の指定を受けた2007年度から、英語活動を5・6年生で年間各35時間行っている。うち30時間にALTが配置されている。だが、活動の立ち上げ当初は、大きな困難に直面した。07年度末に実施した子どもへのアンケートの結果で、5・6年生ともに意欲や理解度が予想以上に低く、「まったく出来なかった」と答えた子どもが多かったのだ。英語主任（当時）

の岩本あずさ先生は、次のように振り返る。「英語が嫌いな理由を聞くと、多くの子どもが『英語が分からない』『活動中に何をすればいいの分からない』という二つの『分からない』を抱えていることが浮かび上がりました」

原因は明らかだった。それまでの「総合的な学習の時間」で行っていた国際理解教育の取り組みの流れから、07年度は活動をALTが主導した。どの教師にも「英語活動はALTに任せれば良い」という意識があり、担任は教室の後ろで見ていることが多かった。と

School Data

◎1992（平成4）年開校。教育目標は「次代に生きる国際人を育む」。英語活動の充実、八千代市教育委員会指定の研究「個性を生かす教育の推進」の一環。5・6年生の活動を担当するALT 2人が派遣されている。



校長◎井上滋先生

児童数◎1,018人 学級数◎30学級

所在地◎〒276-0042 千葉県八千代市ゆりのき台6-20

TEL◎047-484-5541

URL◎<http://www.yachiyo.ed.jp/ekayada/>

図1 教師へのアンケートの結果(抜粋) (%)

	07年度	08年度
ALTの補助者	80	19
児童の理解を助ける仲介者	42	13
学習の雰囲気を作る媒介者*	—	38
指導計画・活動内容の計画者*	—	25

「英語活動における担任の役割はどのようなものだと思いますか(複数回答可)」で各項目を選んだ割合。07年度には「補助者」「助ける」役割と考える割合が高かったが、08年度には「雰囲気作り」「内容等の計画者」などの中心的な役割へと意識が変わってきたことが分かる *07年度には項目が無い

ところが、子どもはALTの話す英語を理解できず、更に活動のねらいも明確にしていなかったため、二つの「分からない」が生じていたのだ。

「通訳」から「活動を進める」 役割へ、教師の意識が変化

活動を始めてすぐの07年度1学期、既に子どもは「分からない」という状況にあった。そこで、担任も徐々に活動に加わるようにしたが、あくまでも「今、こんなことを話したよ」とALTの話を通訳することが中心で、活動の主導はALTだった。このような1年を過ごし、5年生担任(当時)の新垣義貴先生は、英語活動の意味を考え直したと言う。

「子どもにALTの英語を通訳しても、活動の目的があいまいだったため、子どもの意欲は高まりませんでした。そうした姿を見て、

私を含めて多くの教師が『担任が主体的に活動を考え、行う必要がありそうだ』と考えるようになりました」

教師の意識の変化は、07年度と08年度の各年度の初めに実施したアンケートの結果に明確に表れている(図1)。「英語活動における担任の役割」として、「ALTの補助者」を選んだ割合は80%から19%へと大幅に減った。同様に、「児童の理解を助ける仲介者」という回答が減り、担任が「通訳」として参加することに疑問が生じたことが分かる。08年度のアンケートで、「学習の雰囲気を作る媒介者」「指導計画・活動内容の計画者」といった担任が主体的にかかわる項目を設けたところ、これらが回答の上位を占めた。

実践を通じた試行錯誤で ALTとの役割分担を明確化

08年度はまず英語活動のねらいを再確認するため、「英語活動を通して付けたい力」を明らかにした。「英語活動への児童の意欲を高め、コミュニケーション能力を育てたり、国際理解を深めたりする活動ができるようにしていく」ことを目標とし、07年度の反省に基づき「意欲を高める」ことを最も重視した。

その上で、意欲を高めるためには、「英語が『分かる』活動になるように、担任の役割を工夫する」「英語を『楽しい』と思えるように、教え方や教材を工夫する」ことが大切

であると考え、活動を担任主導に切り替えた。当初、苦労したのはALTとの連携だ。

「担任とALTの役割分担がはつきりせず、連携がうまくいきませんでした。担任が英語の指導に不慣れだった上に、ALTにチームティーチング(TT)の経験が無かったことなどが原因だと思います(岩本先生)」

研究授業や中学校の視察をしながら理想的なTTの形を模索し、実際に活動に取り入れて試行錯誤をした。例えばフラッシュカードのめくり方や活動中の間の取り方など、担任がALTの実践を見て、子どものテンポと少しずれていると感じた時は、担任がその部分を代わった。実際に活動しながら「この部分は担任が行った方が良い」と感じた所は、担任が実践を試みた。

担任とALTとの役割分担を工夫していった結果、「ALTも、子どもの興味を引き出すのがうまい担任が進行役を務めた方が良いと感じ、自分はサポート役になってくれたのではないでしようか」と、新垣先生は振り返る。今では、ALTは発音やゲームなどのデモンストレーションを行ったり、表現方法を教えたりする役割を担う。

担任とALTの打ち合わせは、原則として毎週行う。6年生では、まず担任が集まって活動の内容や流れなどを検討。ALTに「この部分はお願したい」と役割分担を確認し、活動内容へのアドバイスを求めている。

担任が進める英語活動

2008年度の課題と実践

担任主体で指導を進める中で、新たな課題も見えてきた。ここでは、課題に対してどのような工夫をしたのかを見ていく。

■指導方針

拠点校として、「英語ノート」(試作版、以下同)の使用を前提として活動計画を立てた。「楽しませて意欲を高める」ことが活動のねらいであるため、担任が日本語を使っても良いとした。クラスルームイングリッシュの使用も担任の判断に委ねた。

■活動の工夫

課題①「英語ノート」に子どもの意欲が高まりにくい内容がある

例えば、6年生の「英語ノート」にあるアルファベットの単元は、週1回の活動で2カ月間を要する内容だった。6年生担任(当時)の石井重佐美先生は、「子どもはゲームなどを通じて学びたいという気持ちが強いのですが、『英語ノート』には机上の学習が多くあります。いかに子どもの気分を盛り上げるかが重要でした」と話す。

改善策 担任が内容を自由にアレンジ

実践を重ねるにつれ、「英語ノート」の内容にこだわらず、子どもの興味や関心に合わせてゲームを追加したり、二つの単元を一つにまとめたりするようになった。

図2 08年度6年生 アルファベットの単元の指導案 H:HRT(担任) A:ALT C:児童 ★:授業後のHRTの振り返り

過程(分)	児童の活動	HRTの活動	ALTの活動	・指導上の留意点 ◎評価の観点(方法)	教材
あいさつ(5)	・あいさつをする Hello, I'm ...	・全体にあいさつをする Let's start our English lesson. Are you ready, ...?	Yes, I'm ready. Hello. How are you?	・英語で元気良くあいさつを交わし、授業の始まりが意識できるようにする	
復習(10)	・カードを見ながら教師に続いて発音する ・大文字と小文字のカードとを対応させて黒板に張る	・小文字のカードを黒板に張る	・カードを指しながら発音する	・大文字のカードを事前に黒板に張っておくことで、時間を短縮する ・小文字同士で形の似ているものや、大文字と形が異なるものについて、特に注意深く練習させる	フラッシュカード
展開(10)	・もらったカードに合う大文字や小文字のカードを持つ児童を探す ・文字が正しいか確認し、発音する	<p>・デモンストレーションをする H:今から対応するアルファベットを持っているかを聞いてペアになるゲームをします。「持っていますか?」って、何と言うの? C: Do you have ...? H: そうだね。じゃあ先生と〇〇先生でやってみます Hi, do you have a big/small "a"? A: Yes, I do. H: Good. ペアの友だちを見付けいたら、黒板にカードを張りに来てください</p> <p>・大文字を取るグループと小文字を取るグループの二つに分ける</p>	・黒板に張られたカードを確認しながら発音する	<p>・児童の様子を見ながら、戸惑っている児童には寄り添い、助言をする ◎アルファベットの大文字と小文字を一致させる<観察></p> <p>★二つのグループに分けることで、自分は友だちに何と言えれば良いのか確認しやすくなった</p>	アルファベットカード
展開(15)	<p>・「アルファベットじじ抜き」を行う ◎カードをもらう時 Do you have a big/small ...? ◎持っている時 Yes, here you are. ◎持っていない時 No, I don't.</p>	<p>・デモンストレーションをする H:今から「アルファベットじじ抜き」をやります。ルールはトランプと同じです。大文字と小文字がそろったら捨てるのが出来ます Do you have a big/small "a"? A: Yes, I do. Here you are. H:持っていたら渡します Do you have a big/small "s"? A: No, I don't. H:持っていなかったら相手のカードのどれかを引きます。そろったら発音して捨てます</p> <p>・各グループに大文字と小文字のカードを配る ・発音に困っている児童がいたら、どのように言うのか助言する</p>	・発音に困っている児童がいたら、どのように言うのか助言する	<p>・英語の表現を使ってゲームを進めるように指導する ・相手が持っていた場合はもらい、持っていない場合はどれか1枚を引く ・カードを捨てる場合、発音するようにする ◎進んでゲームに参加する <観察> ◎進んで英語を使おうとしている<観察></p> <p>★黒板に張ったアルファベットのカードは順番に並べた方が子どもたちが確認するためには良かった</p>	アルファベットカード
あいさつ(5)	・数人が感想を話す ・あいさつをする Thank you, teacher. See you.	・数人に感想を聞く Let's finish our English lesson.	You're welcome. See you.		

「当初は『英語ノート』に忠実に進めようとして苦労しましたが、『内容や流れは自由に変えて良い』と考えるようになってから、気持ちが高まりました」（新垣先生）

同校の6年生で行うアルファベットの単元の指導案（P.15図2）は、「英語ノート」の内容を基に独自のゲームを組み込んだものだ。「トランプの『じ抜き』」を応用して、大文字と小文字を組み合わせるゲームを考えました。アルファベットを使う必然性があるため、子どもは意欲的に取り組み、結果として机上で学習するよりも、大文字と小文字を自然に覚えられたようです」（石井先生）

5年生の「英語ノート」には、絵カードを使って子ども同士が買い物のやりとりをするページがある。新垣先生は、この活動にも子どもの意欲を高める工夫を取り入れた。

「単に買い物をするだけでは面白くないので、‘Discount, please.’というフレーズを教えました。すると、『なるべく安く買い物したい』という気持ちが高まり、子どもたちは夢中になって取り組んでいました」

課題② 「英語ノート」の教材カードには使いつらい物がある

例えば5年生の、果物のカードを組み合わせてフルーツパフェを作るレッスンでは、果物の形ではない四角いカードをガラスの絵の中に置く作業のため作業がしにくく、子どもの活動意欲を高めにくいところがあった。

改善策—使いつらい物は、教師が自作

活動前に必要な教材を検討し、その度に準備。教師間で共有することで負担を軽減した。

課題③ 少しでも分からない箇所があると苦手意識を持つ児童が目立った

英語の聞き取りなどで、一部を理解できれば良い場合でも、完全に理解できなければ「英語は分からない」とすぐに苦手意識を抱く子どもが目立った。「積み上げの学習形式に慣れてきた子どもには、『一部が分かれば良い』という発想がなく、『完璧主義』に陥りがちな傾向が見られました」と岩本先生は話す。

改善策—苦手意識を持たせない指導に

「全部を聞き取れなくても良い」と繰り返し伝えて、子どもを安心させるようにした。「分からなければ、‘Once more, please.’というフレーズを言えば良い」と伝え、「分からない↓つまらない」となるのを防いだ。

■成果と課題

08年度末に行った児童アンケートの結果では、「意欲」「理解」「聞く」「話す」のすべての項目が、07年度に比べて高くなった（図3）。

『分かる』『楽しい』という気持ちにさせるといって08年度の目標は、おおむね達成できました。今後は、クラスルームイングリッシュを徐々に導入するなど、子どもの英語への興味をますます引き出せるように、教師一人ひとりの努力によって活動の質を高めていきたいと思っています」（岩本先生）

図3 児童へのアンケートの結果

	5年生		6年生	
	07年度	08年度	07年度	08年度
意欲	1.29	→ 2.17	0.54	→ 1.83
理解	1.26	→ 2.16	0.61	→ 1.91
聞く	1.46	→ 2.14	1.04	→ 1.68
話す	0.91	→ 1.62	0.32	→ 1.35

年度末に、子どもに英語活動について尋ねたアンケート結果。「意欲」「理解」「聞く」「話す」について、「よくできた」（3点）、「まあできた」（2点）、「あまりできなかった」（1点）、「まったくできなかった」（0点）を数値化して平均を求めた。課題だった意欲も含め、08年度では数値が上がっていることが分かる



八千代市立菅田小学校
6年生担任
石井亜佐美
Ishii Asami



八千代市立菅田小学校
5年生担任
新垣義貴
Aragaki Yoshiki



八千代市立菅田小学校
3年生担任、英語主任
岩本あずさ
Yamamoto Azusa



八千代市立菅田小学校校長
井上滋
Inoue Shigeru

英語と日本語を交ぜながら「英語ノート」のアレンジを

鳴門教育大大学院学校教育研究科准教授 兼重 昇

英語活動のねらいがコミュニケーション能力の向上にあることを理解できたとしても、そのための授業づくりには不安があると言う声は多い。目的を達成する授業づくりのポイントとして、まず何から始めれば良いか。鳴門教育大大学院の兼重昇准教授に、P.7の事例校を例に聞いた。

英語活動で外せない三つの観点

「コミュニケーション能力」を育むために英語活動で重視していただきたい観点は三つあります。

① 担任が活動を主導する

一人ひとりの子どもに応じて活動を進められるのは、子どもを最も理解している担任です。例えば、場面に応じてどの子どもに発言させるのが適切かという判断は、ALTには難しいでしょう。ALTに任せきりでは子どもの実態に合わない活動となり、コミュニケーションしようという意欲が生まれにくくなります。

ALTがリードすると良い場面もあります

が、その場合もねらいや流れをあらかじめ担任が説明し、理解してもらう必要があります。

② 子どもに「コミュニケーション出来た」という達成感を持たせる

英語活動の最大のねらいは、コミュニケーション能力の育成です。英語で気持ちを伝え合えたことを褒めれば、子どもはコミュニケーションの大切さを理解し、実践するようになるでしょう。「出来た」という達成感はその学習意欲を高めます。コミュニケーションをする活動を取り入れ、伝え合おうとする子どもの姿を意識して褒め、達成感を持たせるようにしてください。そうではなく、もし発音ばかりを褒めれば、子どもは「発音が大事なんだ」と思い込んでしまいます。

ポイント

英語活動づくりの

- 1 英語活動は子どもを深く理解する担任が主導する。すべてを英語で話そうとせず、適宜、日本語を使っても構わない
- 2 子どもは「出来た」という達成感から学習意欲を高める。伝え合う姿を褒め、コミュニケーションの大切さを教える
- 3 「英語ノート」は、子どもの実態に合わせてアレンジして使うと良い。その際、指導書の「ねらい」から外れないようにする

③ 「分らないこと」や「即興性」を楽しむ

授業中に伝えたい言葉を英語で表現しようとする際、どのような単語やフレーズを使えば良いか、分からなくなることがあると思います。そうした時は、ALTに質問したり、子どもと一緒に辞書を引いたりしてみましよう。分からない時の解決方法を教えることにもなり、子どもが自主的に考え、学ぶ力も伸ばせるはずです。

他の授業でも同じだと思いますが、とりわけ生きたコミュニケーション活動である英語活動では、「即興性」も大切です。活動計画通りに進めることにこだわりすぎず、子どもの関心や授業の流れをきっかけに活動を広げていくことを楽しみましょう。

実践での取り入れ方

この三つの観点をどのように実践すれば良いのか、私が実際に授業を拝見した出雲市立上津小学校の活動（P.7事例1）を例に説明します。他の先生方にも参考になりそうなお勧めの点、改善点は図1にまとめました。

①クラスルームイングリッシュで活動を主導

担任は、活動の区切りごとに、“Are you ready?” “Let’s play a game!” などとクラスルームイングリッシュを使い、活動の流れをつくっていました。ALTも積極的に活動していました。アモンストレーションを行うなど、あくまでもサポート役に徹していました。担任が活動の区切りを示すことで、担任主導の形になっています。

②コミュニケーションが取れたかどうかを振り返らせる

担任は、活動を始める際に、子どもに“eye contact” “clear voice” “good reaction” というコミュニケーションのポイントを伝えました（P.11図3）。そして、活動の終わりには「Reactionは出来ましたか？」とコミュニケーションを重視した振り返りをさせています。

このような一貫した指導により、子どもはコミュニケーションの大切さを理解します。上津小学校のように、“How are you?” など

図1 上津小学校の事例から学べるヒント

良かった点

- ◎ペアになってインタビューをした
初対面の外国人へのインタビューは難易度が高いのですが、2人1組で取り組み、緊張感を和らげていました。常にペアを組む方が良いというわけではありませんが、この活動は同校の子どもには合っていました
- ◎インタビュー前のゲームにも真剣に取り組んでいた
インタビューで使う表現が含まれていたため、その後の活動がスムーズに進みました。子どもが、「ゲームに次の活動で使う内容が含まれている」と理解しているからでしょう
- ◎プレゼントを渡した
子どもが自主的に「プレゼントを渡したい」と提案。その気持ちを尊重した結果、折り紙を介した豊かなコミュニケーションが生まれました

加えると良い点

- ◎子どもに「ねらい」を考えさせる
外国人へのインタビューの前に「今回は特に“eye contact”と“good reaction”を心掛けよう」と担任は言いました。先にルールを示さず、まずは「外国の方と仲良くなるにはどうしたらよいか」と考えさせても良かったかもしれません。その過程で、“eye contact”などの大切な観点は、子どもから自然と出てくるのではないかと思います
- ◎子どもの気持ちを質問内容に反映させる
外国人への質問は共通の内容が設定されていました。あらかじめ子どもが質問を考え、各自一つプラスしても良かったでしょう
- ◎“Once more, please.” / “Slowly, please.” といった表現を強調して教える
話す相手の名前を覚えることは重要なことです。外国人の名前は、一度聞いただけではなかなか覚えられません。担任は「どんな名前の方がいましたか」と振り返らせても良かったと思います。担任とALTのデモンストレーションには、上記2点のフレーズが含まれていましたが、相手の名前を覚えることの大切さと共にもっと強調して指導すれば、覚えにくい内容もしっかり聞き取りが出来るのではないのでしょうか
- ◎活動で芽生えた興味を次につなげる
活動を振り返る際に「次は何をしてみたい？」などの質問をすると、次回以降の活動のきっかけになるでしょう

のあいさつも形式的にせず、相手の目を見てゆつくりと分かりやすく話すなどを意識させることで、コミュニケーションの基本が身に付いていくのです。

③その場面ならではのコミュニケーションを大切にさせる

「分からないこと」に直面した際でもコミュニケーションを楽しめるかどうかは、想定外の質問を受けた時によく分かれます。子どもは外国人にプレゼントした折り紙について、「What’s this?」などと質問されましたが、身ぶり手ぶりを交えて何とか伝えようとしてい

ました。英語を上手に話すことよりも、表情や身ぶり手ぶりを使いながら、相手に気持ちを伝えることの重要性を担任が日頃から教え、このような場面をつくっていくと良いでしょう。

まずはここから始めてみよう！

英語活動を始めたばかりで、すぐには理想的な活動をつくるのが難しいと感じる先生も多いでしょう。目指すべき英語活動を実現するために、次のようなことから始めてみてください。

担任が進める英語活動



かねしげ・のぼる ◎広島大大学院教育学研究科博士課程単位取得退学後、兵庫教育大助手、鳴門教育大講師などを経て現職。鳴門教育大・小学校英語教育センター兼務。専門は英語科授業研究、小学校英語教育。小学校学習指導要領解説編作成協力者。全国英語教育学会、小学校英語教育学会等に所属。主著に『小学校新学習指導要領の展開 外国語活動編』（共編著・明治図書出版）など。全国の学校を回り、教員研修や授業指導を行っている。

◎「英語ノート」を子どもに合わせてアレンジ
 ゼロから指導案を作り上げるのは大変です。「英語ノート」はコミュニケーション能力の育成を目的として作られた教材なので、それを活用しましょう。ただ、そのまま使うと子どもの実態にそぐわない場合もあります。「英語ノート」を基本としながら、子どもがコミュニケーション活動をしにくい点はアレンジして使うと良いでしょう。また、演劇が得意な先生なら英語劇に力を入れるなど、得意分野を生かした活動を考えることもお勧めです。その学級ならではの活動となるでしょう。

◎指導書の「ねらい」を大切に
 「英語ノート」と一緒に配布される指導書は、すべてを詳細に読む必要はありません。最も大切なことである「ねらい」をつかみ、大まかな活動の流れを参考にしてください。ねらいを踏まえ、子どもの興味・関心などに応じて表現などの言語材料・内容・時数を検討していくと良いでしょう。

◎効果の高い場面から英語を使う
 教師が子どもに発話する場面は、図2のように三つに分類できます。2や3の場面では、日本語で話した方がコミュニケーション能力の育成という観点で有効なこともあります。活動中、常に英語で話す必要はないのです。

◎学習内容について研究する
 あいさつや数の教え方などの文化的な背景を事前に調べて教えることにより、言語だけではなく、異文化に対する興味・関心も高められます。その際、「なぜそうなると思う？」などと考えさせれば、更に効果的です。

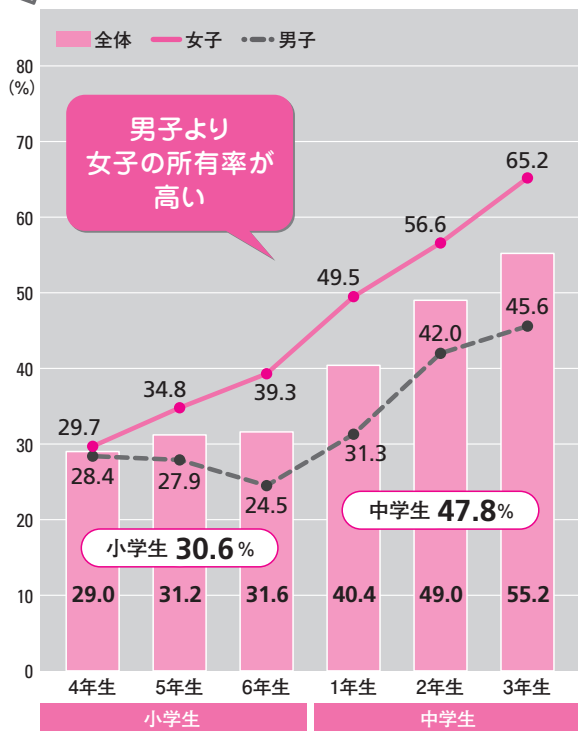
図2

活動場面に応じた英語の使い方とヒント

1. コミュニケーションのモデルを示す場面	2. 子どもと情報や気持ちをやりとりする場面	3. 授業の流れをつくる場面
<p>◎チャンツやゲームなどの活動で用いる表現には決まった表現が多いので、用いる英語表現を活動前に練習してみてください。担任が取り組む姿を見せることは子どもに勇気を与えます。発音に自信がなければ、ALTにモデルとして発音してもらっても良いでしょう</p> <p>◎ALTがない日には、単語やフレーズを読み上げる機能のある電子辞書を、子どもと一緒に使うという方法もあります</p>	<p>◎コミュニケーションのための会話では、日本語を織り交ぜても構いません。例えば、“Which baseball team do you like?”と教師が質問し、子どもがチーム名を答えます。そうしたら、“Why do you like that team?”などと会話を続けたいところです。</p> <p>教師が英語で表現できない、または子どもが理解できないフレーズになる可能性もありますが、教師が“Good.”と言うだけで会話を終わらせるのは、コミュニケーションとして不自然です。このような場合は、日本語でも良いので会話を続けましょう。“How are you?”に続いて具合を聞く時も同様です</p>	<p>◎簡単なあいさつや指示、褒め言葉などのクラスルームイングリッシュについても、一度に多くを覚えるのは大変です。徐々に増やしていくという気持ちで良いと思います</p> <p>◎すべてを英語にする必要はありません。例えば子どもを褒める時には、“Good job.”や“Excellent.”などを用いた後に、短い言葉でも良いので、日本語でより具体的に褒めましょう。子どもの心に届くような褒め方を心掛けてください</p>

1 所有率は3割、女子が高い

携帯電話の所有率（学年別・男女別）



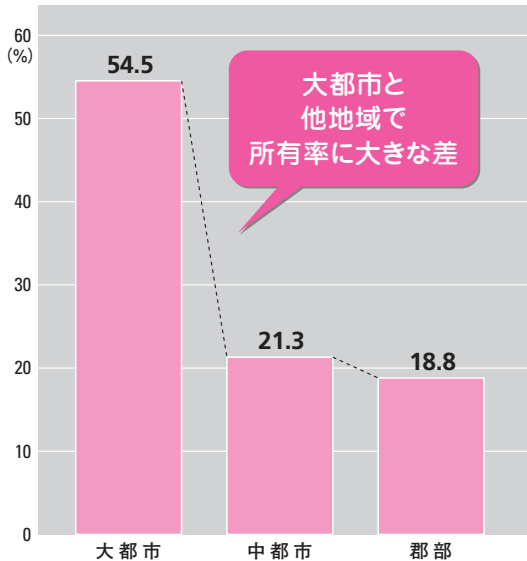
◎小学4～6年生の携帯電話の平均所有率(*)は30.6%。学年別に見ると、3学年とも3割前後で大きな差はない。男女別では女子の所有率は男子よりも高く、学年が上がるにつれて差が広がっている。例えば、6年生女子の所有率は39.3%と5人に2人が持っていることになる。

なお、中学1年生の所有率は40.4%と、小学6年生の31.6%から10ポイント近く上がる。中学校入学を機に携帯電話を持つケースが多いことが分かる。

*「自分専用の携帯電話を持っている」と「家族と一緒に使う携帯電話を持っている」の合計

2 大都市5割、他2割と所有率に地域差

携帯電話の所有率（小学4～6年生・地域別）



◎携帯電話の平均所有率(*1)は、地域の規模(*2)によって大きな差がある。大都市では54.5%、中都市では21.3%、郡部では18.8%と、大都市に住む小学生の所有率の高さが目立つ。

規模が大きい地域ほど、習い事や塾の送り迎え、安否確認などのために、保護者が子どもに携帯電話を持たせる必要性をより強く感じていることが、理由の1つと考えられる。

学年	大都市	中都市	郡部
小学4年生	50.0%	23.9%	16.5%
小学5年生	57.4%	21.8%	19.4%
小学6年生	56.9%	18.4%	20.2%

*1「自分専用の携帯電話を持っている」と「家族と一緒に使う携帯電話を持っている」の合計

*2「大都市」は東京23区内、「中都市」は人口密度が中程度で人口規模が20～30万人程度の地方中規模都市、「郡部」は人口密度が低く人口規模が1～5万人程度の町村部、としている

文部科学省が「学校への持ち込み原則禁止」との通知を出した携帯電話。小学生の所有率は3割程度だ。近い将来使う日が来ることを念頭に、学校や家庭で今のうちから伝えるべきことを考えたい。今回は、子どもが携帯電話を「どのような意識」で「どのように使っている」のか、その実態を紹介する。

携帯電話の利用実態

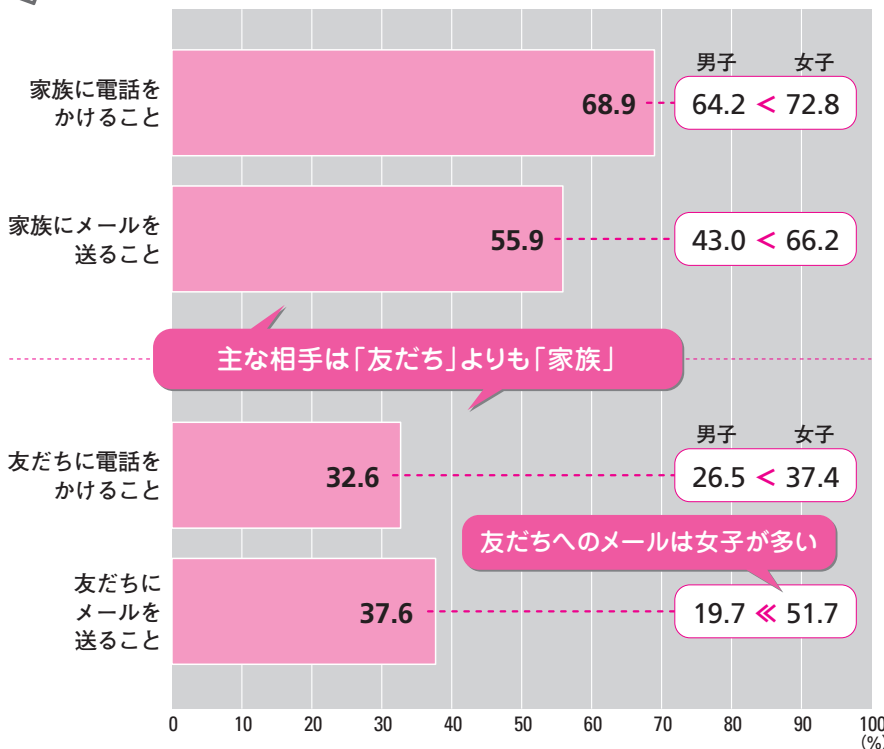
本コーナーで紹介している調査結果の詳細はウェブサイトでご覧いただけます



<http://benesse.jp/berd/>
→HOME>調査・研究データ

3 使うシーンは「家族への電話」が中心

電話・メールの利用形態（小学4～6年生・1日に1回以上行う割合）



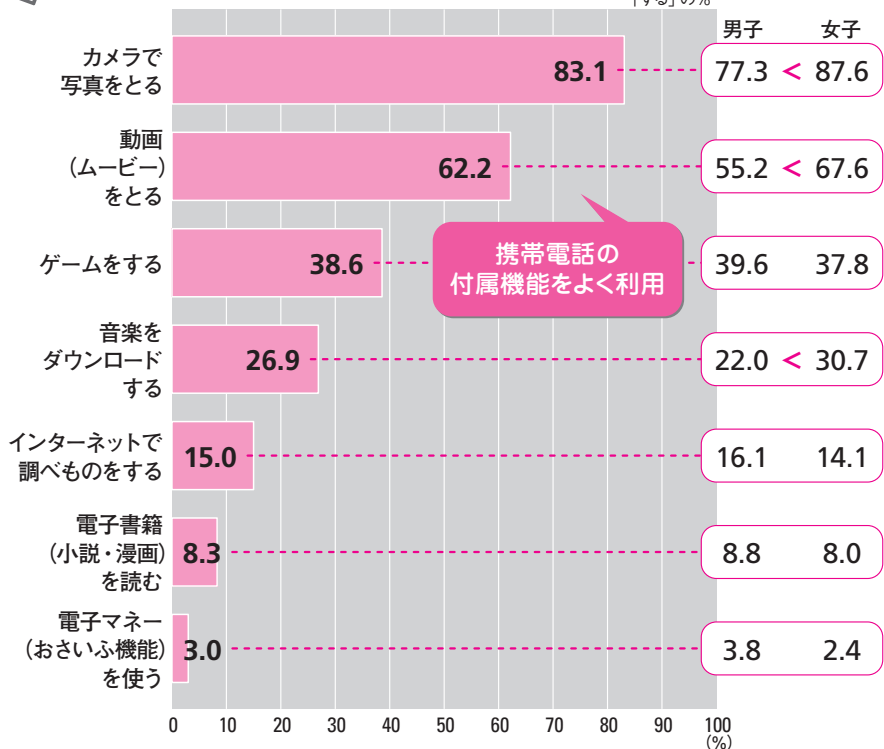
◎携帯電話で連絡する相手は、家族が中心だ。携帯電話を持つ子ども（*1）が1日1回以上（*2）家族に電話をかける割合は約7割。友だちに電話をかける割合（約3割）より高い。携帯電話を持つ友だちが少ないこと、保護者が通話先を限定しているケースが多いことなどがその理由だろう。

図示はしていないが、中学・高校生になると使い方に大きな変化が見られる。友だちとの連絡に使う割合が増え、使い方でもメールが中心となっていく。

*1「自分専用の携帯電話を持っている」「家族と一緒に使う携帯電話を持っている」と回答した人のみ対象
*2「1日1回以上」=1日「1～2回」「3～5回」「6～10回」「11～20回」「21～30回」「31～50回」「51～100回」「101回以上」の合計

4 電話とメール以外にカメラ・動画撮影をよく利用

携帯電話の機能別利用率（小学4～6年生・電話とメール以外）



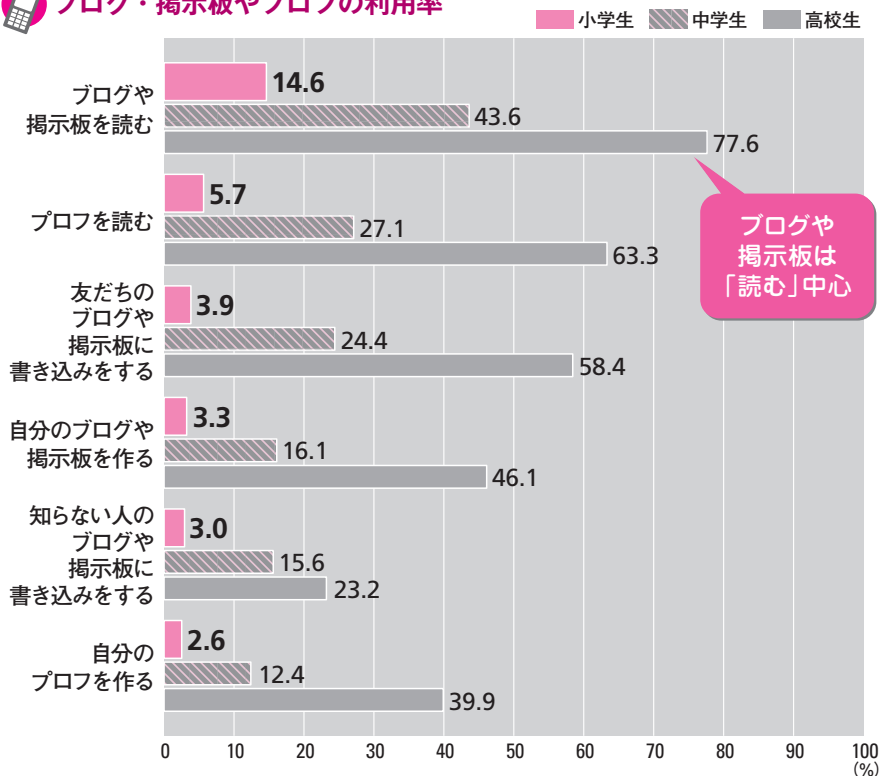
◎電話とメール以外に使う携帯電話の機能は、「カメラで写真をとる」が最も多くて約8割、次に多いのが「動画（ムービー）をとる」で約6割だ。全体的に携帯電話本体の付属機能を利用する割合が高く、「音楽をダウンロードする」など専用サイトへの接続が必要なサービスや、認証や課金が発生するサービスを利用する割合は低い。

*「自分専用の携帯電話を持っている」「家族と一緒に使う携帯電話を持っている」と回答した人のみ対象

5 「ブログや掲示板を読む」小学生は7人に1人



ブログ・掲示板やプロフの利用率



ブログや
掲示板は
「読む」中心

◎「ブログや掲示板」「プロフ」について、携帯電話やパソコンを使って「読む」「書き込む」「作る」割合を見てみよう(*)。小学生で最も多いのが「ブログや掲示板を読む」で、およそ7人に1人。他の利用は3~6%程度にとどまっている。

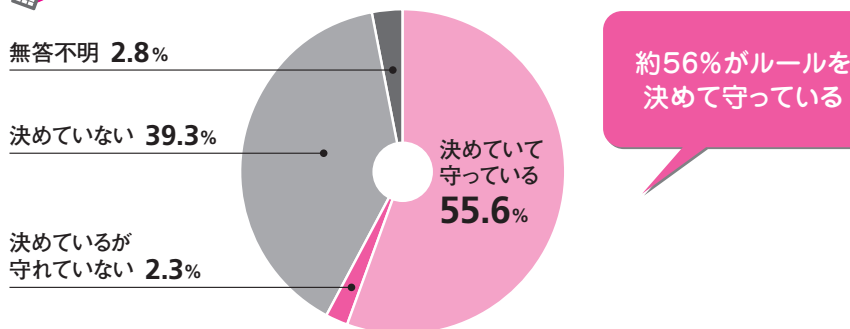
しかし、中学・高校生になると、すべての利用率が大幅に増える。例えば、中学生の3~4割程度がブログや掲示板、プロフを読むことがあると回答。学校段階が上がると共に、大人の目が届きにくいネット上のコミュニケーションが急増する様子が見えてくる。

*「あなたは、次のようなことをすることがありますか」という設問に対して、「しない」「パソコンだけである」「携帯電話だけである」「パソコンと携帯電話の両方である」「わからない」の5択で回答。数値は「パソコンだけである」「携帯電話だけである」「パソコンと携帯電話の両方である」の合計

6 4割が使い方のルールを決めていない



携帯電話の使い方についてのルールの有無 (小学4~6年生)



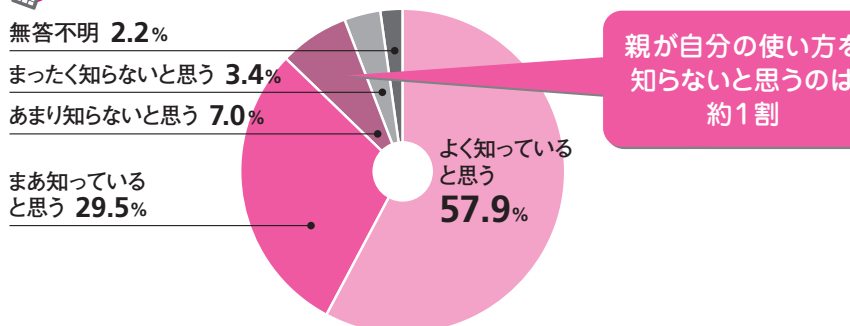
約56%がルールを決めて守っている

◎携帯電話の使い方のルール(約束事)を、保護者と「決めていて守っている」割合は、携帯電話を持つ小学4~6年生のうち5割強。一方、「決めていない」小学生も約4割いる。

携帯電話をどのように使っているかを保護者が「よく知っていると思う」と答えた小学生は57.9%で、「まあ知っていると思う」は29.5%。約9割の子どもが、「親は自分の使い方を知っている」と思っているようだ。一方、「あまり知らないと思う」は7.0%、「まったく知らないと思う」も3.4%と、少数だが親が知らないと思っている子どもも存在している。



携帯電話の使い方についての親の認知 (小学4~6年生)



親が自分の使い方を知らないと思うのは約1割

*「自分専用の携帯電話を持っている」「家族と一緒に使う携帯電話を持っている」と回答した人のみ対象

研修会や保護者会に役立つ！ 携帯電話や情報モラル教育の お薦めウェブサイト

文部科学省

子どもの携帯電話等の利用に関する調査（速報）

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/21/02/1246177.htm

◎保護者のかかわりの度合いが子どもの利用マナーに及ぼす影響や、学校における情報モラル教育の取り組みなどの最新状況が分かる

モバイル社会研究所【(株)NTTドコモ】

モバイル社会白書2007

<http://www.moba-ken.jp/theme/whitepaper/whitepaper2007/whitepaper2007-content>

◎携帯電話に関する児童・生徒からの相談内容など、教師のみなを対象に行った調査結果もある。暮らしや文化、産業など幅広い視点から携帯電話をとらえたデータが興味深い

教材「みんなのケータイ」

<http://www.moba-ken.jp/theme/kidsmobile/textbook>

◎携帯電話の利用マナーを学ぶための配布用素材や学習指導案が豊富

社団法人日本PTA全国協議会

子どもとメディアに関する意識調査

http://www.nrsquare.com/pta/book_kodomotomedia_h20/

◎携帯電話だけでなく、ゲームやインターネット、漫画などメディア全般に関する子どもと保護者の意識が分かる

社団法人日本教育工学振興会

やってみよう情報モラル教育

<http://www.kayoo.info/moral-guidebook-2007/>

◎携帯電話やインターネットについて、使い方のルールやマナーだけでなく、日々の授業に取り入れたい便利な機能や実際の活用例、カリキュラムが多数掲載されている

総務省

第5回情報化社会と青少年に関する意識調査

<http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/jouhou5/index.html>

◎利用のルールやフィルタリングサービスについて、子どもと保護者の考えの違いが分かる。それぞれのデータがダウンロードできる

※上記は2009年4月時点での情報です

1～6 出典

「子どものICT利用実態調査」Benesse教育研究開発センター
調査時期は2008年9～11月、調査対象は公立学校の小学4年生～高校2年生で、有効回答数は合計10,267人（うち小学生は3,146人）。抽出法は市区町村の人口規模及び人口密度を考慮した有意抽出法

次号
予告

生活時間
について取り上げます

まとめ

保護者の協力を得て 目の前の子どもに合った対応を

携帯電話は周囲の目に触れにくいところでも使えることなどから、「究極のパーソナルツール」ともいわれる。小学生の所有率は、全体で見れば約3割（P.20 1）だが、性別や地域などによって差が生じている（同 1 2）。更に、「携帯電話は必要か」「子どもに持たせるか」「持たせるとしたらどのように使わせるか」といった判断は、放課後の過ごし方や保護者の教育方針など、子ども一人ひとりの状況によって異なる。重要なのは、平均的なデータや手本となる取り組みを参考にしつつも、一律の指導ではなく、目の前の子ども一人ひとりに合わせた対応を心掛けることだ。

新しい学習指導要領には、総則に「（コンピュータなどの）基本的な操作や情報モラルを身に付け、適切に活用できるようにするための学習活動を充実すること」と示されている。これに伴い、道徳の「指導計画の作成と内容の取扱い」でも、「道徳の内容との関連を踏まえ、情報モラルに関する指導に留意すること」とある。新課程の先行実施で十分な時間を割くことは難しいかもしれないが、自校の実態に応じて、取り上げるべき内容の優先順位をよく考えた指導を工夫したい。

ただ、携帯電話を持たせるか、どのように使わせるかを最終的に判断するのは保護者だ。実際、子どもが携帯電話を使うのは主に学校外であり、連絡を取る相手は家族が中心だ（P.21 3）。携帯電話の所持や使い方は、学校だけで指導できることではないことを保護者に理解してもらい、子どものことを最もよく知っている保護者が、それぞれの家庭や子どもの状況に合った使い方やルールを話し合うように働き掛けることが、大切ではないだろうか。

小学生のうち、中学生や高校生と比べて利用用途が限られ（P.21 4、P.22 5）、家族とのコミュニケーションが比較的取りやすい時期。今が、その絶好の機会と言える。

小学校英語！



実践事例

佐賀県鹿島市立明倫小学校

「英語ノート」を活動のヒントにし 伝わる喜びを感じさせる

鹿島市立明倫小学校が英語活動で目標としているのは、
他者やさまざまな文化と積極的にいかかわり、理解しようとする子どもの育成だ。
普段から子どもの様子を見ている担任だからこそ出来る単元をつくり、
活動に配慮することによって、子どもに「伝わる喜び」を体験させている。

担任ならではの配慮で
安心して参加できる
雰囲気をつくる

鹿島市立明倫小学校は2005年
度に英語活動を始めた。鹿島市から
指定を受け、「総合的な学習の時間」
に国際理解教育を取り入れたのがき

っかけだ。当時の対象は3年生以上
だったが、07年度から2年間、文部
科学省の小学校英語活動等国際理解
活動拠点校に指定されたのを機に、
全学年に活動を広げた。現在は1・2
年生10時間、2・3年生20時間、5・6
年生35時間の活動を行う。研究主題
は「進んで人と関わりコミュニケーション
ションを図ろうとする子どもの育

成」。言葉や文化が違う相手とも積
極的にかかわり、理解しようとする
ことへの関心・意欲を育もうとした。
当時から研究主任である小國千百
合先生を始めとして、大半の教師が
英語活動は未経験だった。

「『自分には無理ではないか』と不
安でいっぱいでした。でも、ALT
と話すうちに、単語だけでも気持ち
は相手に伝わるのだと徐々に実感し
ました。身ぶり手ぶりを交え、伝え
ようとする積極的な気持ちが大切な
のだと分かったのです」（小國先生）
教師自身の経験を通して、子ども
にも同様の体験、すなわち「コミュニ
ケーションの楽しみ」「伝わる喜
び」を感じさせることが大切だと気
付いた。そして、この喜びを感じさ
せるための活動づくりが始まった。

まず、全学年で「English Time」
を実施した。毎週金曜日の朝の帯時
間に15分程度、ゲームや歌、読み聞
かせなどを行う。子どもにとっては
英語活動への導入となり、担任にと
ってはクラスルームイングリッシュ
の実践の場となる。

5・6年生の英語活動では、拠点
校指定を受けた2年間に独自の指導
案を作成した。特徴は、1コマで完



鹿島市立明倫小学校校長
國政幸二郎
Kunimasa Kojiro



鹿島市立明倫小学校
小國千百合
Oguni Chiyuri
研究主任

結する活動ではなく、数時間を1組
の単元として、一つのテーマで連続
性のある活動を展開していること。
テーマは、他教科での学びと連携し
た事柄（国旗なら社会科など）や、
校区の中学校の時間割や部活動など、
身近な事柄を取り入れている（図1）。

「子どもは、自分になじみのある
話題でなければ関心を示しません。
活動を単発ではなく単元にしたのは、
次の活動へと興味・関心を喚起し、
継続させるためです」（小國先生）

活動ではコミュニケーションの意
欲を育むため、ALTと子ども、子
ども同士で質問やクイズを出し合う
活動などに最も多くの時間を充てる。
活動の中心となるのは、「English
Time」「英語活動の時間」のいずれ
も担任だ。「担任は子どもが関心を
示しそうなアイデアをたくさん持つ

*プロフィールは取材時（09年3月）のものです

図1 単元づくりの例

トピック (学年)	(単元名)活動名	児童の主な活動	主な英語表現
世界の 国々 (5年生)	《国のシンボルを知ろう》 花や鳥の名前を知ろう 世界の国旗を知ろう 国のシンボルを知ろう	・花の名前探しゲームや 鳥の名前ビンゴゲーム をする ・指示を聞いて色を塗り、 国旗を完成させる ・国旗ビンゴをする。社会 科で習ったことを思い 出しながら国のシンボル クイズをする	・tulip / lily / carnation / sunflower / rose / cherry blossom / violet / swan / hen / owl ・What country is this? / Where is the country? rectangle / circle / France / Italy / Sweden ・Do you know the symbol of Japan?
学校 生活 (6年生)	《中学生になったら》 どんな教科があるのかな 何の部活に入ろうかな 中学校の1日を知ろう	・教科について知る。 ALTの国の教科を知る ・中学校で入りたい部活 動を伝える。ALTの国 の放課後の様子を聞く ・日本独自のクラブや授 業などを知る	・What do you want to study? I want to study... subject / English / math / science / art ・What club do you want to join? What is a popular club? tennis / soccer / kendo / judo ・calligraphy / sado / kado / naginata / sumo

子どもの関心を基に活動を決めてから、使う英語表現を決めていく
出典:「英語活動年間計画案」(鹿児島市立明倫小学校)

図2 《できることを紹介しよう》「英語ノート」(試作版) 活用例(全4時間)

時・活動名(形態)	活動内容 (「英語ノート」との関連)	言語材料等
第1時 《English Time》を含む 「クイズカードを作ろう」 (HRT)	・動物が出来ることについての クイズやジェスチャーゲー ムなどを楽しみ、動作を表す 表現に慣れる(「英語ノート」 P.24) ・出来ることのヒントから動物 を当てる「クイズカード」を作 る	walk / run / jump / swim / fly / climb / elephant / bear / monkey / penguin I can (walk / run / swim / jump). I cannot (fly / swim / jump). Who am I ? ・CDの「Let's Listen 1」の部分はALTが 行い、HRTは子どもの反応を見ながら働き 掛けを行う
第2時 「あなたはできますか」 (HRT・ALT)	・作ったクイズカードをALTに 出題して楽しむ ・スポーツなど自分たちの動 作を表す言い方を知る ・友だちの出来ることや出来 ないことを予想し確かめる (「英語ノート」P.25~26)	swim / play / baseball / soccer / table tennis / kendama / piano / guitar / ride a unicycle / cook Can you...? Yes. / No. ・CDの「Let's Listen 2」の部分はHRTと ALTで行い、子どもの反応を見ながら進める ・CDの「Activity 1」の部分はHRTが行い、 子どもの反応を見ながら進める
第3時 「できることを調べよう」 (HRT)	・クラスメートに出来ることを 尋ねたり、答えたりする (「英語ノート」P.27) ・先生たちの出来ることを予 想して当てる ※詳細は次ページ	swim / play / baseball / soccer / table tennis / kendama / piano / guitar / ride a unicycle / cook Can you...? Yes. / No. ○○sensei can play the guitar. ・CDの「Activity 2」の部分のインタビューは HRTと子どもとでモデルを示してから進める
第4時 「自分のことを紹介しよう」 (HRT)	・自分の出来ること、出来ない ことを絵で表現し紹介し合う (「英語ノート」P.28~29) ・絵本の読み聞かせをする "What can we do?"	I can ... I cannot/can't ... What can we do? We can... ・Activityは絵で表現させたり、実演させたり しながら進める

「英語ノート」は活動に合う内容を抜き出して使用する。そのため、必ずしもページ順に使うわけではない

子どもの実態に合わせ 「英語ノート」を 部分的に活用する

ています。これはクイズが得意なあの子に当てよう、おとなしい子は積極的に行動する子と同じ班にしようというように、子どもが安心してコミュニケーションできるように配慮もできます」と、小國先生は説明する。

このような実践の結果、ALTに何とか伝えようとしたり、活動後も単元のテーマについて話したりする子どもの姿が見られるようになった。

同校は拠点校の研究の一環として、08年度に「英語ノート」(試作版)を使い始めた。ただ、すべての時間で使うわけではない。年間指導計画と照らし合わせ、活動に利用できる部分を選んで使う。また、付属のCDは

出来るだけ使わないようにしている。「CDの英語は話すスピードが速く、本校の子どもには難しいようです。音声として一方的に聞くだけでは、集中力が途切れてしまうのです」(小國先生)

CDを使う場合でも、収録されている単語・文章の一部を抜き出し、発音の手本はALTが、コミュニケーションの手本は担任とALTが行う(図2)。ALTがない場合は一時

停止機能などで速度を調整する。

「子どもの反応を見ながら進めることが重要です。本校では、『分かった』という喜びを感じさせることによって、次への動機付けにしたいと考えているため、速いスピードに徐々に慣らしてリスニングの力を付けると、という方法は採っていません」と、小國先生は話す。

6年生用「英語ノート」のLesson 1(アルファベットの章)は、中学校との接続を考慮して最終学期に実施した。「英語ノート」は「活動のヒントがたくさん詰まった教材」と位置付けて使いこなすというのが、同校の英語活動における考え方だ。

「学校によっては、『英語ノート』を授業の中心に据えた方が子どもの反応は良いかもしれません。ただ、『英語ノート』に沿って進めるとしても、一つでも担任が独自性を加え、子どもの反応を見ながら活動を進めると良いと思います」(小國先生)

國政幸二 郎校長(当時)は「目の前の子どもにきちんと向き合っている、コミュニケーション能力を育む活動が出来るのだと思います。それが、小学校が行う英語活動の最大の意義ではないでしょうか」と語った。

「英語ノート」(試作版)を活用した08年度明倫小指導案より 「できることを調べよう」(6年生 HRTの授業)

Hop!
Step!
小学校英語!

- 目標
 - ・友だちに出来ることを尋ね、積極的にコミュニケーションを図ろうとする(関心・意欲・態度)
 - ・友だちと互いにどのようなことが出来るのかを尋ねたり、答えたりする(表現)
- 扱う表現
 - ・Can you play...? Yes. / No.
- 準備するもの
 - ・「英語ノート」P.26の絵を拡大したもの
 - ・先生たちの顔写真と出来ることを示した絵

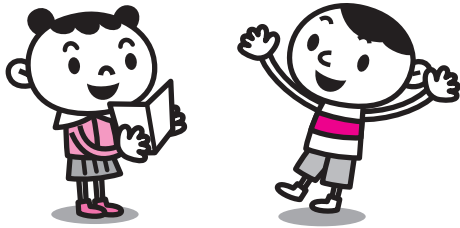
2 インタビューゲーム

8分

- 1 「英語ノート」のP.27にある九つの絵に示されたことが出来るのかを、友だちに尋ねるゲームを行う。まずHRTと1人の子どもがやりとりの見本を示す
- 2 教室内を自由に移動して、子ども同士で出来ることを質問し合う

Can you play soccer?

Yes.



- 3 絵に示されたことが出来る友だちを見つけたら、その名前を「英語ノート」に書いてもらう



1 あいさつ・キーワードゲーム

7分

- 1 簡単にあいさつをし、和やかな雰囲気にして活動を始める

"Hello, everyone. How are you?"

- 2 2人1組でキーワードゲームをさせる。まず「英語ノート」P.26の絵を拡大して黒板に掲示

"play baseball,
play soccer, swim, cook,
play the piano"

と、HRTが手本を示し、子どもに続いて言わせる



- 3 キーワード(soccer, baseballなど)を決めておき、HRTがキーワードを言ったら、発音せずに2人の間に置いたコマ(消しゴムなど)を素早く取らせる。早く取った方が勝ち

Let's play the Keyword Game.
Make pairs. Put an eraser on the desk.
The phrase is "play soccer".

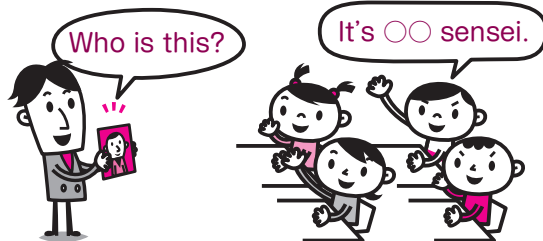


4

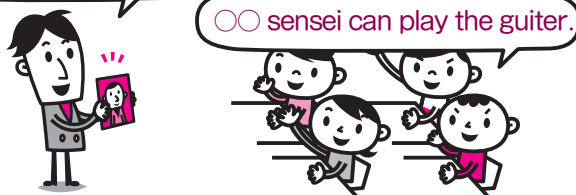
クイズ

5分

- 1 数人の先生の顔写真と、先生が出来ることの絵を提示。先生の出来ることを予想し、当てさせる



Guess what ○○ sensei can do.



5

活動の振り返り

5分

- 1 活動の感想を「振り返りカード」に書かせる
- 2 日本語でもよいので、数人の子どもに感想を発表させる
- 3 発表を聞きながら、適宜、子どもの頑張りを褒める
“You did very well. That's all for today.”

point 2

- I can play ... という表現を覚えるだけでなく、子どもが互いの理解をより深めたり、意外な発見を通じてコミュニケーションを深められるように留意する

3

インタビュー結果の発表

20分

- 1 インタビューしたことを基に結果を発表させる。その際、出来る人が少なかった絵を中心に聞いていく



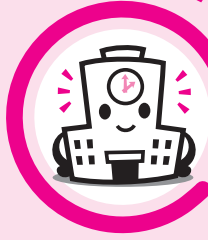
- 2 インタビューをして思ったことや予想と反していたことなどを発表させる

- 3 けん玉や一輪車などが出来る子どもがいたら実演をさせ、全員で称賛する
“Let's give ○○ a big hand.”

point 1

- 同校では、朝の「English Time」にゲームを行っているので、キーワードゲームの時間を短めに設定している
- 質問は1組で1回ずつ行う。ただし、答えが“No.” だった場合は、もう1回だけ質問できる。進め方を十分に分かった上でやり取り出来るように、子どもの反応を見ながら説明する
- 積極的に尋ねている子どもがいたら、他の子どもにも分かるように褒める
- 言いにくそうにしている子どもや、前の活動でうまくやり取りが出来なかった子どもには、近くに寄り添い、一緒に質問したり、答えたりして支援する

つながる



学校と家庭の学び

親子で知的好奇心を高める 「サイエンスニュース！」

宮崎県延岡市立延岡小学校 宇都宮 浩先生

延岡市立延岡小学校の宇都宮浩先生は、保護者を対象にした教科新聞「サイエンスニュース！」を発行し、理科の授業内容や理科への関心を高める話題を伝えている。子どもとの会話のきっかけとしても、「理科離れ」を家庭から食い止めることが主なねらいだ。

授業の内容を伝え 親子の会話のきっかけに

「子どもの自然体験が少なくなつた」と言われるようになって久しい。親世代の科学への関心が薄くなったことも、昨今の理科離れの一因ではないかと指摘する声もある。

「海や川の自然に恵まれた本県でも、その例外ではありません」と、延岡市立延岡小学校の宇都宮浩先生は話す。

このような状況の中で子どもの理科への関心を高めるためには、まず

保護者に働き掛けて科学への興味・関心を呼び起こし、家庭で子どもと一緒に話が出来る話題を提供してはどうだろうか……。そう思った思

いから、宇都宮先生は教科新聞「サイエンスニュース！」を2001年度から発行している。

「前任校で理科の専科教員になり、担任を外れたことが『サイエンスニュース！』を始めたきっかけでした。保護者との接点が大幅に減ったため、理科について保護者に直接話す機会が少なくなってしまう、と危機感を抱いたからです」

以来、担任を持った年も月1回ほどのペースで発行し、担当する学年の保護者と教職員全員に配付してきた。

紙面に取り上げる話題は、主に授業の報告だ（図1）。

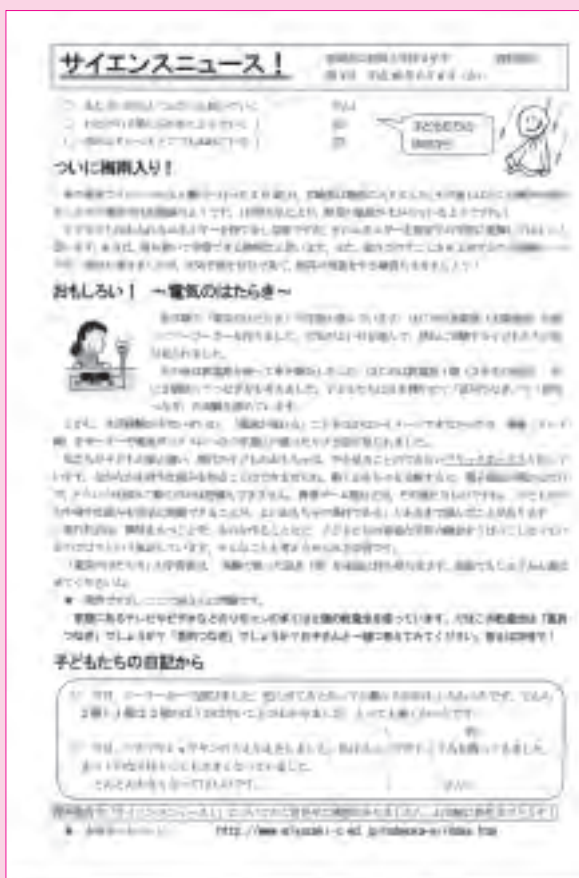
「わざわざ『サイエンスニュース！』で取り上げなくても、授業の内容は子どもが家で普通に話すのではないか、と思われるかも知れませんが、今の子どもは学校でやらなければならぬことがたくさんあり、なかなかすべてを保護者に話しきれないようです。しかも、

高学年になればなるほど、保護者とあまり話をしない子どもが多くなります。国語や算数については話をしても、理科となると、子どもが授業で何をしているのか知らない、と言う保護者が少なくありません」（宇都宮先生）

実際、紙面を読んだ保護者からは「子どもが何を学んでいるか分かる」「『サイエンスニュース！』をきっかけに理科のことを親子で話した」という感想が多く寄せられる。

授業内容以外にも、四季折々の風物、テレビや新聞で取り上げられた

図1 「サイエンスニュース！」



◎2006年6月6日発行号

理科の授業に対する子どものコメントを日記より抜粋して紹介した。また、「電気のはたらき」の授業内容と子どもの様子を紹介し、関連クイズを出題した。「お子さんと一緒に考えてみてください」との一言も添えた



◎2006年11月20日発行号

国語の説明文「ウミガメのはたらき」に登場するアカウミガメについて、授業では取り上げなかった生態などを解説した。紙面を作る際に参考にしたウェブサイトの一覧も紹介
*ウェブサイトは、発行当時のものです

宮崎県延岡市立延岡小学校

◎延岡市の中心地に位置する、1889（明治22）年に開校した市内で最も歴史ある小学校。校内研究のテーマを「国語科学習の学び合いを通して、確かな学力が身につけられる授業の工夫」として、授業改善・学習環境の整備などにも力を入れている。

校長 伊藤忠俊先生
児童数 466人
学級数 16学級（うち特別支援学級2）
所在地 〒882-0803
宮崎県延岡市大貫町1-3000
TEL 0982-33-2105
URL <http://www.miyazaki-c.ed.jp/nobeoka-e/>



延岡市立延岡小学校
宇都宮 浩
Utsunomiya Hiroshi
教務主任、理科主任

出来事など、理科への関心を高めるようなタイムリーな話題を取り上げる。避難訓練のある時期には地震について解説したり、国語の教材に出てきた動物について紹介したりと、学校行事や他教科に関連する話題も提供してきた（P.30図2）。こうしたテーマを扱うことで、保護者の理科への関心呼び起こしながら、子どもと共通の話題を提供することがねらいだ。まずは目を通してもらうことが大切と考え、読み物としての面白さを優先して書いている。

『「サイエンスニュース！」が、自然な親子のコミュニケーションの糸口になって欲しいと考えています。理科の学力を直接的に向上させるといよりは、長い目で見て、将来に

図2 「サイエンスニュース！」の話題

4年生対象	2006年5月	<ul style="list-style-type: none"> ●春の生き物新聞作成中！ 中庭や運動場で虫・植物について調べたことのもとめ学習として作成している新聞について、経過報告 ●種を植えたよ!! ～ヒョウタンとヘチマ～ 種をまいた際の子どもの様子、ヘチマの名前の由来など
	2006年8月	<ul style="list-style-type: none"> ●星空を見上げましょう 夏の星座を紹介。親子での星座鑑賞の勧め ●ついに実が!! ～ヒョウタン・ヘチマ～ 4月に植えたヒョウタンとヘチマの成長ぶりを報告
	2006年11月	<ul style="list-style-type: none"> ●「科学」を満喫！ ～宮崎科学技術館の見学～ 秋の遠足として訪れた科学技術館での、子どもの様子を報告 ●楽しい実験 ～空気や水～ 授業の実験で使った空気鉄砲や水鉄砲について紹介
3年生対象	2007年5月	<ul style="list-style-type: none"> ●アオムシに夢中！ モンシロチョウの幼虫の成長観察についての報告 ●国語「自然のかくし絵」に出てくるコノハチョウについて 国語の教材に登場するチョウの生態、生育地などについて詳細を解説
	2007年7月	<ul style="list-style-type: none"> ●七夕伝説の星は？ 一年に一度?? 七夕伝説や、実際の星の距離などについて紹介 ●ホウセンカ順調に育つ！ 種から育てているホウセンカについて。昔は、つめを染めるのに使っていたことなどを紹介
	2007年11月	<ul style="list-style-type: none"> ●雲を見上げてみましょう！ 雲の公式名称や分類、その特徴などについて解説 ●今がチャンス！ ホームズ彗星を見よう このころニュース等で話題になっていたホームズ彗星について紹介

授業に関する話題で 子どもの発展的な学びも支援

つながるような形で科学全般への興味を高められれば、と思っています」

「サイエンスニュース！」には、授業から一歩踏み込んだ内容を掲載することもある（P.29図1）。

例えば、乾電池で電気の働きについて授業で扱った後、それらの仕組みが日常生活でどのように生かされているのかを知ってもらおうと、「テレビやビデオのリモコンは、直列つなぎか並列つなぎか」というクイズを出した。また、国語の説明文で取り上げたアカウミガメの生態や生息地、絶滅危惧種であることを紹介しながら、環境保護について考えようと呼び掛けた。

こういった「授業＋アルファ」の情報を取り上げる際には、子どもの自主学習の手掛かりとなるように、記事を書く際に参考にした科学雑誌や書籍、ウェブサイトを明記するようにしている。そこには、子どもの学びを支援したいという思いがある。

「基本的に大人向けに書いている

『サイエンスニュース！』ですが、理科が得意な子どもも楽しみにしてくれています。学校の一斉授業の中ではそうした子どものフォローがなかなか難しいので、『サイエンスニュース！』が発展的な学びの入り口になることを期待しています」

授業の補完という意味では、星の動きの単元で、保護者に宿題への協力を呼び掛けたこともある。「夜空を見上げよう」という単元に関連し、夜、月の動きを観測するというものだった。

「月の動きを実感するためには、1時間おきに3回の観測が必要です。ただ、子どもが1人で夜、外に出て観測するのは危ないため、保護者の協力が必要でした」

紙面で、観測できる期間と観測方法を説明し、以下のような一言を添えた。

「余程興味があるお子さんや、将来、専門的に勉強するお子さん以外は、4年生のこの機会でなければ月の観測を経験することはまずないでしょう。お子さんに貴重な経験を積ませる意味でも、ぜひご協力ください」

「教師にとっては何度も教えてい



ベネッセは、『学校&家庭 学び応援プロジェクト』を実施しています。

ベネッセは2007年度から「家庭学習に関する冊子」や「教育に関する情報冊子」などを先生方やご家庭に無料で提供するプロジェクト「学校&家庭 学び応援プロジェクト」を実施しております。
2009年6月は、保護者向け冊子「家庭で楽しく！ 子どもの好奇心がぐんとふくらむ本」の受け付け、また、ご家庭からは夏休みに子どもの好奇心を高める、楽しい実験が詰まった冊子「夏休みわくわく実験★好奇心UPブック」のお申し込み受け付け(*)を行います。御校の教育活動にぜひお役立てください。

*同時にスペースシャトルで宇宙へ行った、貴重な植物の種の栽培キットのお申し込み受け付けもを行います

保護者向け冊子

「家庭で楽しく！

子どもの好奇心がぐんとふくらむ本」



学校&家庭 学び応援プロジェクト
ホームページ

<http://www.benesse.co.jp/manabiouen/>

ることでも、子どもにとっては一生に1度の機会となります。ですから、一つひとつの学びを大事にしたいのです」と言う宇都宮先生の思いを込めた言葉だ。この呼び掛けに多くの保護者が応え、観測に協力してくれたと言う。

保護者と教師の架け橋に 信頼関係にも一役

理科に限らず、得意分野や専門知識を生かして「サイエンスニュース！」のような情報発信をしたい、と思う先生もいるだろう。しかし、授業や校務に多忙な中で定期的に発行するのは難しいと、思いとどまるかもしれない。

「サイエンス！」。宇都宮先生は続けるコツを「自分自身が楽しむこと」と話す。

「『サイエンスニュース！』を書くことは、私自身にとっても得ることが多く、負担には感じていません。むしろ楽しいですね。ニュースを書くためにいろいろな本を読みたい、学びたいと、学ぶ意欲にもなっています」

続ける上で何よりも励みになっているのは、保護者や子どもからの感想だ。

「普通、受け持ちの学級以外の保護者と話す機会はなかなか無いものですが、面識のない保護者から『サイエンスニュース！』のあの話は面白かったです、と声を掛けられることが増えました」

子どもの感動への共感が 知的好奇心や情操を育む

「サイエンスニュース！」発行の目的は、前述のように、保護者の理科に対する興味・関心を高めながら、子どもと共通の話題を提供することにある。そこから更に、子どもの学習意欲の向上へと発展させるためには、保護者はどのように関わっていけば良いのだろうか。

「知識を教えることは学校の役割。保護者には、授業や日常の中で子どもの驚きや感動を受け止めて、『すごいね』などと声を掛けることを大切にしていただきたいと思います」(宇都宮先生)

子どもが命の神秘や不思議に触れた時に何かを感じたら、保護者がそれに共感を示すことが、子どもの知的好奇心や情操を育てると、宇都宮先生は考える。

「理科に対して社会全体の関心が低下してしまうのは、大きな問題です。理科を通して、子どもにいろいろな感情や実感を伴う経験をさせることが出来るはず。保護者の皆さんには、ぜひそれを支えて欲しいのです。『サイエンスニュース！』を通して、そうしたメッセージを伝えたいと思っています」

教科の「真価」を再認識してもらうことが、保護者の支援を得るための第一歩となる。宇都宮先生の取り組みは、理科以外の教科でも応用できるはずだ。

テーマ：忘れられない教え子たち

◎成績があまり良くなかった子が、通信簿を渡した時に「先生、僕の10年後を見ていてください」と一言。現在、立派な大人になっています。 [福島県/T小学校/O・M]

◎6年生を担任した時、卒業式を終えて教室に戻ると、H君が突然「先生、『仰げば尊し』を歌っていいですか」と言ってきました。「歌わせてください」と言うのでうなずいたところ、大声で歌い出しました。周りの子どもも一緒になって歌い、涙いっぱいのお別れになりました。教師をやっている良かったなと思った瞬間です。

[埼玉県/栄小学校/江森孝夫]

◎昆虫が大好きな男子に「『ジンガサハムシ』という金色で透明な虫がいるんだよ」と話したら、実際に捕まえてきました。その後、毎年春になると必ずその虫を持ってきます。私が転任してもジンガサ君を見せに来てくれる「春を告げるエンジェル」です。 [静岡県/F小学校/小澤久美子]

◎前任校でのD君は友だち付き合いが下手で、休み時間は本を読んだり、一人遊びをしたりしていました。3年生の1学期間、私は彼の手を引いて体育館に行き、一緒に過ごしました。徐々に他の子と遊ぶようになり、6年生の時は児童会長になり頑張りました。 [北海道/H小学校/M・E]

◎詩を学習した時、作品の語彙が素晴らしい子がいました。その素晴らしい才能を磨くためには、私の指導力では不十分で、誰か専門の先生を探してやらなければと、真剣に考えました。 [東京都/富士見小学校/小島英樹]

◎勉強が苦手だった子が、分数の計算が得意になり、ある時、「勉強って楽しい」とつぶやきました。それ以降、意欲的に学習に取り組むようになりました。

[福島県/福島第二小学校/Y・T]

◎初任のころ、休み時間に児童が突然「A君が階段で吐いた」と職員室に教えに来ました。正直なところ「えっ」と思いながら、場所などを確認して現場に向かうと、担任をしていた4年生の女の子が新聞紙を持って片付けていました。「あ

りがとう」と言うと、「お母さんと時々していますから」と、あっけらかんとした答えが返ってきました。周りの子どもは尻込みし、実は教師の自分もすぐには手を付けられませんでした。その愚かさを猛省して、その後の頑張りの糧としています。 [岩手県/安渡小学校/今野義雄]

◎ボランティアで、校門周辺の掃除を毎日行った子どもがいました。卒業式当日も「今日はいいいよ」と声を掛けたにもかかわらず、笑顔で取り組んでいました。

[愛知県/桜町小学校/生田勝利]

◎担任した学級は、学級対抗リレーの3連覇を懸けて6年生最後の運動会に臨みました。2年間の優勝に続き、その年のリハーサルでもダントツの1位。当日、予想通り大差を付けて、学年で一番足の速いアンカーにバトンが渡りました。その子は一気に加速し、差をますます広げ、歯を食いしばり全速力でゴールを駆け抜けました。私はその子に「2位と50メートルも差が付いているのに、よく最後まで油断せず全力で走れたな」と声を掛けました。すると、その子はこう言ったのです。「僕たちのクラスは決して強くありません」と。大差があっても力を抜かずにゴールした姿に、教わるものがありました。 [青森県/中央小学校/竹浪誠也]

◎いつもノートや本にくまなく恐竜の絵を描いていた子がいました。大人になり、デザイナーになりました。

[滋賀県/H小学校/N・A]

◎「教育は繰り返しですね」。25年前に受け持った2年生の男子が私に対して言った言葉。初めて受け持った学級で、しょっちゅうしかっていたやんちゃな子でした。

[大分県/A小学校/M・T]

次号のテーマは

「もし職員室を自由に変えられたとしたら？」

このコーナーでは、毎号異なるテーマについて、先生方から頂いた思いやご意見を紹介します。テーマに関するご意見は小誌ウェブサイト（裏表紙参照）からご投稿ください。お待ちしております。

編集後記

2009年度は従来4月に刊行していた年度内の第1号を、6月に変更致しました。内容面では、新学習指導要領の移行措置に関する情報を取り上げ、調査データコーナーも拡充致します。小学校教育が更に良いものになるよう、先生方と考える参りたいと思います。今号でも、多くの先生方に授業を見せていただいたり、お話を聞かせていただいたりしました。心よりお礼を申し上げます。次号以降も何とぞよろしくお願い致します。(青木)

VIEW21 小学版 2009 Vol.1

2009年6月8日発行/通巻第20号

発行人 新井健一
 編集人 原 茂
 発行所 (株)ベネッセコーポレーション
 Benesse教育研究開発センター
 印刷製本 大日本印刷(株)
 編集協力 (有)ペンタコ
 執筆協力 柴崎朋実、二宮良太
 撮影協力 荒川潤、川上一生、谷口哲
 イラスト協力 西谷久、幸剛

◎お問い合わせ先
 VIEW21編集部
 〒163-1422 東京都新宿区西新宿3-20-2
 東京オペラシティタワー22階
 電話 03-5371-1238

©Benesse Corporation 2009